

ポケットモンスター B&W another ～隻腕の幻影 ゾロアーク～

Mr.bot—8M6N

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イツシュ地方南東部の小さな村。

そこで当時の私はあるポケモンと出会いました。

そのポケモンは大柄であるのに細身。黒の体毛に覆われ、紅色の夕テガミと顔の様子が歌舞伎を連想させる狐型のポケモン。

その名はゾロアーク。

彼との出会いが数年後の私をポケモントレーナーにし、ポケモンを連れた旅路へと駆り立てたのだと思います。

これは、そうなるまでの物語。それからの物語。

「私はもう一度貴方に会いたい」

「任天堂って二次創作に厳しいって聞いたんだけどマジ？」 by 作者

目 次

	あの日々に得た物失った物―LOST	1
	1―1 あの向こうに……①―CONTACT―	1
	1―2 あの向こうに……②―INTRUSION―	5
	1―3 あの向こうに……③―OVER THERE―	9
	閑話① 彼は結構綺麗好き	16
	閑話②―1 病床の小娘を探して・上	21
	閑話②―2 病床の小娘を探して・下	29
	2―1 貴方の名前は何ですか?①―RAINY―	39
	2―2 貴方の名前は何ですか?②―INFORMAL―	42
	2―3 貴方の名前は何ですか?③―NAME―	54
	2―4 貴方の名前は何ですか?④―RELATIONS―	61
	3―1 降る雨は暗示する①―REGRET―	68
	3―2 降る雨は暗示する②―MEANNESS―	72
	3―3 降る雨は暗示する③―GAZE―	77
	3―4 降る雨は暗示する④―HOSTAGE―	84
	4―1 紅色に染まる①―SMOKE―	91
	4―2 紅色に染まる②―IRREGULAR―〔リメイク!〕	99
	4―3 紅色に染まる③―CHOISE―	108

間を通るイツシュ地方1番道路。両脇を深い森挟まれ、海に通じる17番水道が流れる一本道。

その日、当時8歳だった私はそこに一人で足を運んでいました。一人では決して行ってはいけなさと色んな人から注意されていたというのに。

理由はもう5年以上前の話なので覚えていません。何か嫌な事があって逃げ出した先がそこだったのか、ただの怖い物見たさだったのか……。それでも、私の家族が「村の外は野生のポケモンがいるから危険だ」と言っていた事と、当時の私はその注意を軽く見ていたことだけは覚えています。

「百聞は一見にしかず」とはよく言ったもの。色んな知人から口を酸っぱくして言っていた言葉を身をもって体験しました。

三匹のミネズミに襲われた私は当然にげました。道路から外れ森の奥へ奥へと。

走って、走って、走り続けて……。疲れ果て、「もう駄目だ」と諦めかけたその時――。

私は彼と初めて出会ったのです。

――（（〇））――

「あうッ」

森の中で子供が倒れる音がした。木の根に足を取られたのだ。突然の事に受け身も取れなかったのだろう。倒れる音と一緒に土を削る音がする。

「……う、うう」

手のひらや膝、肘。身体の節々の出血の痛みに堪えながら、その子供は何とか立ち上がるうとしていた。その子供は栗色の髪の毛を後ろで束ねたポニーテールが特徴的な齢10歳にも満たない少女だった。

「――……ハアッ……はあっはあっ」

バクバクと早鐘を打つ心臓の悲鳴がうるさい。

全力で……命懸けで森の中を走ったというのに、背後からガサガサという生い茂った草同士で擦れる音がする。その音が、少女を恐怖に駆り立て心臓の音を更に跳ね上げる。

「に、逃げないと……速く……」

近くの木の幹に手を伸ばし、それを支えに立ち上がろうとする。

しかしー、

「……………あれ?」

立ち上がりかけた膝は急に崩れ、その足がストンと地面に落ちた。立ち上がれない。

「な、なんで!?……………どうして!」

それだけでは無い。足に遅れて腕までも力が入らなくなり小さな痙攣を起こしている。

それは、森の中を息さえ忘れて全力疾走した代償。血中の酸素が極端に少なくなり、筋肉を動かすエネルギーが枯渇しているのだ。

もう座っている事すら出来なくなりバタリと倒れる。声を出すことすら億劫で、荒い息を整えようとするだけで精一杯だ。

ガサリという音がやけに明確に聞こえた。同時に背後に3つ分の気配を感じ取る。確認しなくとも分かる。きつとさつきまで少女を追い回していた野生のポケモンだろう。

ー……………ああ、死んじやうのかな、私。

身体は未だに痙攣から回復する兆しは無い。背後から『ヂヂツ……………』というネズミのような鳴き声が聞こえる。状況は言うまでもなく絶望的だ。

ー……………ごめんなさい、お父さんお母さん。

三つの気配の内一つが少女に飛びかかる。

動けない少女は目を瞑り歯をくいしばる事で、来であろう衝撃を待つ。

『……………ヂョオツ!』

ー瞬間、背後で小さなポケモンの悲鳴が、何か鈍い音と共に少女の耳に届く。

そして、少し遅れて 地面を削るような着地音が前方から聞こえ

る。

「……………え？」

堪えるように瞑っていた目蓋を開き前方の音の主を捉える。

そこにいたのは、今まで彼女の人生において一度も見つた事がない種類のポケモンだった。

黒と灰の体毛に覆われた 大柄でありながら細身の躯体。鋭く伸びた爪は血を吸ったかのうように赤い。頭部から背中に伸びた鮮やかな紅のタテガミはそのポケモンを覆う程に大きく、地面に擦れそうな程に長い。

『……………チッ』

少女も少女を襲ったポケモンも周りに生い茂る草木にも、そして自身にさえ……………何もかもが忌々しいと言わんばかりの舌打ちを打ちながら、そのポケモンは悠然と少女の視界の中に立っていた。

l t o b e c o n t i n u e d |

1-2 あの向こうに……②――INTRUSIO
N――

2

俺は野生のポケモンである。名前はまだ無い。というか、興味が無いので一生付くことは無いだろう。

ただ、人間の中で「ばけきつねポケモン」という分類と「ゾロアーク」という個体名称を与えられている事は知っている。

特性「イリュージョン」を駆使して、他のポケモンや人間に化ける事ができる狐型のポケモン。それが俺であった。

――（（○））――

ゾロアークは人間の少女ガキをミネズミドブネズミが襲う所を木から別れた枝の上から見ていた。

そこにいたのは本当に偶然だ。

潜伏先を探し、彷徨っていた先に都合の良さそうな森を見つけた。その先で、人間の少女ガキを三匹ドブのミネズミネズミが襲っている所に出くわしたのだ。

『……チィッ！』

その光景を見てイラつきがそのポケモンの中で生じた。

――あのミネズミども……。よりにもよって人間を襲っていやがる。

そのポケモンにとってそれはこれ以上無い程の最悪の状況だった。たとえば自身と縁も所縁も無い連中の所業であつてもだ。問題は自身の眼前で繰り広げられているという事実だ。

ゾロアークは野生のポケモンだ。しかし、他の野生ポケモンとは違い、人間社会の構造についての理解があつた。

人間という個体は戦闘面では弱い。知能は高い。他の生物はしないであろう便利な道具の開発。他の生物と積極的に関わり従える。

それだけで十分に脅威だ。しかし、ゾロアークが人間を過剰に恐れているのはそんな事ではない。いや、それらが人間の厄介さに拍車をかけているのだから全く無関係とは言えない。

それでも、ゾロアークが人間を最も恐れる理由。それは「人間社会」という異常に広く大きい群コミュニティれだ。人間を除いた生物の群れの規模は個体ごとによって変わるが、十匹前後が普通。どんなに多くても3桁を超える事はない。しかし、人間は違う。人間のコミュニティの規模は万とか億といった途方も無い数だ。おそらくこの世界のほぼ全ての人間がこの1つのコミュニティを形成している。

例えば、ゾロアークが何かの生物と敵対するともれなくその敵対生物のコミュニティが全て敵に回る。そして、自身はコミュニティから孤立した一匹狼。よっぽど相手が間抜けか自分が上手く立ち回らないと確実に一対複数の事態に陥る。これが、人間以外なら戦うなり逃げるなりすればなんとかなる。幸い、ゾロアークは個体としての強さに恵まれている。

しかし、人間の場合は違ってくる。特に個人ではなく社会が動くレベルになるとどうしようもない。一人を倒せば二人が。二人を倒せば四人が。四人を倒せばそれ以上の数が。まるでねずみ算のように規模を増やして延々と追い、襲ってくる。更に敵対した個体の情報は瞬く間に広がり、そこから調べ上げ、癖や弱点を研究して次が来る。

——そんな物、相手をしていられるか！

だから、そのゾロアークは今までの生涯で人間を傷付けた事は一度として無かった。自身を捕まえようとするトレーナーがいたら、手持ちのポケモンを瀕死に追いやるだけでそれ以上は何もしなかった。

人間の恐ろしさを理解出来なかった馬鹿な過去の群コミュニティれの仲間は全て切り捨てて一匹狼になった。

更に言うと、ゾロアークは今人間から追われている。

人間社会全てではないが、数えるだけで億劫になる規模が動いている。別に何かをした訳ではないが、何処かの組織か好事家にも目が

留まってしまったのだろう。イツシュ地方では自身は非常に珍しいらしい。ついでに特性「イリユージュオン」を携えたゾロアークを捕まえようとするポケモントレーナーは沢山いた。今回、その中でもかなり厄介な連中に狙われたのだ。

それもほとぼりが冷めるまで何処かに隠れていたら解決するだろうと考えていた。

奴らも馬鹿では無い。イツシュ地方東部に逃げ込んだ事は知られているだろう。ここに隠れているだけならいつか見つかる。しかし、複数の潜伏拠点を留意し、それらを飛び回っていたらいつかは警戒網が解ける。そのタイミングで別の場所に高飛びする。そういう算段を立てていた。

だからこそ、目の前で起ころうとしている惨状に怒りしか覚える事が出来なかった。

ここであの少女^{ガキ}が死んだとなれば、その情報が人間社会中に広がる。そのほとんどは気にも留めないだろうが、ゾロアークを探してる連中はそうはならないだろう。

確実に人を差し向けてくる。それは潜伏拠点を潰されるという事だ。

ーークソツタレガツ

怒りで赤くなる視界をそのままに、ゾロアークは木から倒れるように落ちていった。

ゾロアークの自身の長いタテガミをたなびく。

どうやら、三匹のミネズミの内の一体が少女に襲いかかったようだ。わざわざ近づいてくれたのだ。遠慮する必要は無い。

ゾロアークは、空中で巧みに身体を操り着地の姿勢を取る。

空中で今まさに人間に襲いかかる直前だった一体のミネズミの体長50cm程の矮躯を両足で捉える。

そして、ゾロアークはそのまま地面と自身を用い、鈍い音と共にミネズミを押し潰す。

押し潰されたミネズミは小さな悲鳴の後、ピクピクと痙攣するのみで何の動きも見せない。ゾロアークの体重は80kg前後。そんな物が高い所から落ちてきて踏み潰す。瀕死だ。

だが、容赦はしない。そのまま死体蹴りだと言わんばかりに腰を落とす。

「ーむしタイプ・物理攻撃技 『とんぼがえり』」

ゾロアークが自身の化け物じみた跳躍力で後方に飛び上がる。踏み潰されたミネズミの矮躯はその衝撃に耐えかね、地面の上でバウンドしてもう一度地面に落ちる。もう、ピクリとも動かない。確実な絶命の手応えをゾロアークの足は伝える。

そのまま、ゾロアークは少女の上で一回転バク宙をして、地面に降り立つ。

「……………ぽ、ポケモン？」

倒れてから碌に動きを見せなかった少女の眩きが、ゾロアークの耳に届く。どうやら、無事のようにだ。大きな外傷も無い。最悪の事態は回避できたようである。

『ヂ、ヂイツ!!』

そう言えば、まだ二匹雑魚が居た、とゾロアークは思い出す。だが、今はそれよりもこの少女ガキの方が優先だ。

「ー……………失せろ、雑魚ども。」

「ーノーマルタイプ・変化技 『にらみつける』」

殺意を込めた睨みに残りの二匹は動く事も喋る事も許されない。蛇に睨まれた蛙の如くその場で震える事しか出来ない。

どれだけの時間が経ったのかミネズミは分からない。いや、時間を考える事さえ許されていない、というべきだろうか。

突然、「フィツ」とゾロアークの視線が人間に移った。ただ金縛りのような視線から解放されたミネズミは先程自分達に追い回された人間の子供のように逃げ去る事しか出来なかった。

l t o b e c o n t i n u e d |

1-3 あの向こうに……③—OVER THER
E—

3

——おい、ガキ。もう安全だぞ。

だからいい加減立と軽く少女を蹴る。

——……あ？

反応が無い。先程まで意識があつたようだが……。

そう考え、ゾロアークは右足で器用に少女を転がす。

少女の顔色は悪かつた。息も荒く、意識があるか分からない。

——まさかマヒ……いや、毒か？しかし、あのミネズミドブネズミに毒系の技は無かつたはずだが……。

『……チッ』

ゾロアークは舌打ちを打った後、少女を三本の爪で器用に抱え上げてその場から姿を消した。

——((○))——

「……………う、ううん」

いつの間にか意識を失ってしまったていたようだ。少女—トウカは目を覚ます。

「フカフカあ……」

それでも、意識は完全には覚醒していないらしく今は背中の沈み込みそうな程に柔らかい何かに身を任せたまま動こうとしない。

(えーと、私……何してたんだっけ？たしかー)

——たしか、ネズミみたいなポケモンに追われて……途中で動けなくなつて……その後、見た事ないポケモンが……って私何で無事なの!?

そこまで思考が回つた所で意識が覚醒する。飛び上がるように起

き上がり、辺りを確認する。

そこは少し開けた森の中。近くに小さな川がながれている。

(多分、あの川は17番水道……?なら、この川の流れと反対方向に向かえば1番道路にもどれる?)

何となくだが、帰れそうだという事が分かり安心感を覚え、もう一度あの柔らかい感覚に身を任せる。

(そう言えば、このフワフワなんだろう?)

そう思い、その柔らかい感触の物体を確認しようとしたその先で少女トウコはコチラを見る視線と合った。

それはミネズミに襲われた時に現れた謎のポケモン。狐のような細い顔つきと鋭い視線で「ジー」とコチラを見ている。

「……ヒッ」

トウコは、反射的に距離を取る。しかし、そのポケモンはただコチラを見つめたまま動こうとしない。

小さな静寂が一人と一匹の間に生まれる。

ややあつてー、

『……ケツ』

ーという素っ気ない一声と共にそのポケモンは視線を逸らし眠り始めた。

「え、えー……」

少女は困惑気味だ。何故あのポケモンは私を襲わないのだろうか、という疑問が頭の中を支配している。というか、あの柔らかいのはあのポケモンの長く紅いタテガミだったのね。

「……ねえ、あなたはどこかのトレーナーのポケモンさん?トレーナーさんは何処にいったの?」

『チツ……』

その狐型のポケモンは目を閉じたままコチラを見ようとしなかった。ただ、今のトウコの言葉に不快さを隠さない舌打ちを打った。……どうやら、トレーナーは居ないようだ。

(という事は……もしかし、野生のポケモン?野生のポケモンが助けてくれたの?)

トウカは今の今まで忘れていたが、自身の傷が綺麗に洗われている事に気付いた。痛みもそこまでではない。見れば、近くに潰れた木の実が一箇所にとめられている。

(傷口からきのみの匂いがする)

おそらく、あの潰れた木の実は傷薬の代わりになるエキスが詰まっている物だろう。聞いたことがある、傷口がない時に応急処置として、何かの木の実の果汁が使われる事を。

「……ねえ、貴方が助けてくれたの？何で？」

紅毛のポケモンは何も答えない。目を閉じまま、うつ伏せで寝ようとしている。

「ふふ……変なの」

トウコは小さな笑みを浮かべ紅毛のポケモンに近付く。そして、おそれるおそれるそのポケモンに語りかける。

「……わたしはトウコって言うの。ねえ、あなたは？」

『……………』

やはり何も答えない。トウコも何となく答えてくれないだろうと思っていた。

トウコは空を仰ぎ見る。随分と時間が経ったような気がしていたが、まだまだ太陽は登り切ったばかりのようだ。なかなかキツイ日差しに目を細める。

「まだちょっとお昼を過ぎた位なんだ……。ねえ、もう少しとなりにいても良い？」

そう言つて、トウコはゾロアークのタテガミに身を預けて「すすー……」と寝息をたて始める。

ゾロアークは困惑した目を向けるも溜息をついて少女同様に眠り始めた。

イツシユ地方南東部の小さな村の近くの昼下がり、一人と一匹の寝息が森の中で小さく響いていた。

——(((())))——

「…………ウコ…………トウコってば!!」

私を呼ぶ声がする。幼馴染の女の子の声だ。

「…………あと、五分…………」

しかしすまぬ、幼馴染よ…………。今はこの極上のフカフカを堪能するという使命が…………。

「こんな所で寝てたら風邪引いちやうよ!」

「…………幼馴染ベルよ…………私は…………このフカフカを…………たん…の…………ぐう…………」

「何、変な寝言言ってるのお?!ここ、おもいつきり地面の上だよお!もう起きてえ、トウコおく…………」

(地面の上?…………そう言えば、あのフカフカの感覚が…………無い!?)

「トウコお…………って起きた」

トウコは跳ね起き、辺りを見回す。いつの間にか日が傾いてしまっていたようだ。西の空が茜色に染まり始めている。そこは、1番道路とカノコタウンのほぼ境の草むらだ。遠くに自宅の光が見える。

「ふ…………」

「ふ?」

「フカフカはッ!フカフカは何処に行ったあ!!」

トウコ、吠える。トウコは幼馴染の両肩を掴みガクガクと揺さぶる。

「何処だっ!言えっ!さもななくば、貴様の乳を将来的にデカくするゾ!」

ついでにおかしな事も口走り始めた。

「そうだった…………寝起きのトウコはヤバかったんだ…………ふええ、助けてえ、チエレンくトウヤ〜!」

それにベルが小さな悲鳴をあげ、助けを求める。

「お、おい、トウヤ!この馬鹿を引き剥がせ!チエレンのやつが本気で泣きそうだ!」

「う、うん…………。トウコ、取り敢えずフカフカは自宅に帰ってからね?」

今日、叔母さんが布団干してたの見たから。きつとフカフカだよ?」

トウヤと呼ばれた少年が荒れ狂う害獣を引き剥がす。助けられた

ベルは半泣きだ。

「フカーツ!!フカーツ!!フカーツ!!」

「……いい加減にしろ!この馬鹿女ツ!」

ゴツツという音が奇声を上げ始めたトウコの頭に叩き込まれる。

「いったあ!何するのよツチエレ……………居たの、チエレン?それにトウヤも」

ートウコ は しょうき に もどった!

「居たよ……………というか、さつさとベルに謝れ!半泣きじゃないかツ」

「チエレン、私は良いから……………」

「僕も謝った方が良いと思うよ。……………まあ、何時もの事だけどね」

チエレンと呼ばれた少年は眉間に皺を寄せている。トウヤという少年も何処か困り顔で笑っている。

「ベル?……………ってどうしたのよ、ベル!涙目じゃないっ!まさかチエレンの奴に何かされ……………いったああい!!」

「チエレン、そんなに女の子の頭はポカポカ殴る物では無いと思うよ」

「そうだそうだよ。ぼうりよくはんたい」

「……………おい、トウヤ。その馬鹿をそのまま捕まえておけ。あと何発か叩き込む必要があるらしい」

「……………チエレン。……………トウコもチエレンを弄らない。それより、ベルにちゃんと謝ろうか」

「うツ……………ゴメンね、ベル」

「う、うん……………大丈夫だよ。ちよつと、驚いたただけだから」

「今度、チエレンが何かやったら私に言いなさい!ブン殴ってあげるから!」

「え、え?……………えつと……………う、うん?」

「お前、いい加減にしろよ!」

「へーんだ。毎度毎度、私の頭を殴ってきてからに。偶には私にも殴らせなさい!」

チエレン相手になら何処まで噛み付くと言わんばかりのトウコに全員がため息をつく。

「この馬鹿、人が心配したというのに……………」

「え？チエレン、貴方、私を心配していたの？どうして？」

チエレンが？私に？、何か心配させたわけ？ という様々な疑問を込めた言葉にチエレンは黙り込む。

「……………」(↑チエレンの むごんパンチ)

「……………とうツ」(↑トウコの ききさつち からの ぜんりよくかいひ)

「……………わっ」(トウヤの ガード……………成功)

今まで散々殴られてきた経験がトウコの中で生きたようだ。(トウコの) 理不尽な一撃を見事に回避してのける。

「な……………なんか分からないけど、チエレンが急にキレたわツ……………逃げるわよ、ベル。それにトウヤも」

「え、え……………」

「あれはトウコが悪いと思うよ。……………まあ、いきなり殴りかかってきたチエレンもどうかと思わないでもないけど……………」

「……………」(↑無言で殴りかかるチエレン)

三人が逃げ(内、二人は巻き込まれ)、一人がそれを追う。その姿が1番道路から遠ざかっていく。

(全部、夢だったのかな……………)

両隣に幼馴染を引き連れて走るトウコの心に小さな寂しさが風ぐ。そこに息を若干切らせたベルが話しかける。

「……………と、トウコ。朝から全然見かけないから心配したんだよ？それに服は泥だらけで……………怪我も一杯あるし」

「え……………」

本当だ。服は泥だらけで膝や手のひらにも大きめの擦り傷が残っている。それにー

「……………木の実の匂いがする」

「木の実？……………本当だ、これってオレンの実かな？他にもいくつか……………」

トウヤが無遠慮にトウコの匂いを嗅ぐが、気にならない。それ以上に何かを満たされていくような感覚がトウコを支配する。

「フフ……………そっかー、そっかそっかー。夢じゃ無かったかー！」

「……トウコ?」

急に上機嫌になったトウコにベルまトウヤも困惑気味だ。

トウコは振り返る。そこにはメガネに光が反射してイマイチ表情の分からないチエレンがいるだけだ。

……でも、その向こう。1番道路を北に進んだ17番水道との境にはきつとあのポケモンがいる。

「ふっふー!何でもないよー。二人とも、今から鬼ごっこだ!自分の家に早く帰り着いたヤツが1番ね!……鬼は後ろの鬼畜眼鏡がボランティアでやってくれるって!」

西空の茜色が東空の藍色に染め返される春のある日、私はきつと運命に出会っていたのだと思います。

l t o b e c o n t i n u e d l
l n e x t e p i s o d e l

閑話① 彼は結構綺麗好き

4

あのポケモンと出会ってからしばらく経ったある日の事。私は何時ものように1番道路を抜けて17番水道の境へと向かいます。

そこは、森の中でポツカリと開いている。真ん中に生えた一際大きな木が辺りの栄養と光を独り占めしたからこそ出来た空き地だ。その近くに、下流に行けば17番水道となる小川が流れており、その水も中心の大木が奪っているのだろう。

そんな空き地に最近現れたポケモンが我が物顔で陣取っている。

私はそのポケモンを「キツネさん」と呼ぶようになった。

別にキツネさんはあの大木のようにここを独り占めしようとしている訳ではない。実際、私がここをほぼ毎日のように訪れても何も言わない。………というか、いつも『……ケツ』とか『……チツ』としか言わない。

では、何故ここを陣取るような状態になっているかというのと、他の野生のポケモンがキツネさんを怖がって近づこうとしないのだ。この辺りの野生ポケモンと比べ一線を画する強さを持っているキツネさん。野生に生きる彼らには近づこうとすら思えない存在なのだろう。

だからといって他のポケモンの事を考えて場所を譲るという思考は持ち合わせていないキツネさん。

まあ、そのおかげかどうか知らないが、キツネさんと出会って以来一度として他の野生ポケモンから襲われた事は無い。出会う事はあっても何故か遠巻きに見られるだけである。

「キツネさーん、来たよー。キツネさーん！」

………

返事が無い。………あ、何時もの事だコレ。

しかし、いつもは大木の木陰で涼んでいる筈だが、そこにも居ない。

珍しい。私が来る時はいつもこの辺りにいる。というか、ここに居なかつた事そのものが初の事。

この辺りを探して居なかつたら、少し待ってみますか。

――（（○））――

結果から言うと、見つかりました。それはもうあっさり。因みに、見つけた場所は例の小川です。

しかし、私はキツネさんに声をかけていません。というか、木陰に隠れています。

何故なら――

「キツネさんが水浴びしていらつしやる……」

――からです。

水浴びしてたら何か悪い？ いやいや、そんな事ありません。しかし、キツネさんの水浴び。結構レアです。

そう言えば、キツネさんのタテガミを背中に預けて寝る事がある。野生のポケモンなのだから多少小汚いイメージがあつたが、それで服が汚れたという事は無かつた。

何となく、声をかけずらかつたのでこのまま観察しておきましょう。

……何故かイケナイ事をしている気がする。相手、ポケモンだよ？

大丈夫か、私。

――（（○））――

と言っても、私が覗いたのは殆ど身体を洗い終わった後のようで、キツネさんは浅瀬に近づいてきました。

いたたまれなさが半端ないので声をかけちゃいますか。

「キツネさ……」

と言いかけた所でキツネさんは此方に背を向けて座り込んだ。浅

瀬なので上半身が水面から見えている。

え？出ないの？と困惑する私を他所にキツネさんは後頭部に手を伸ばした。

鋭い爪しかない三本の指で頭皮を傷付けないように細心の注意を払いながら触れる。

頭頂部はジグザグを描くように撫でる。

首の後ろの辺りからは円を描くように撫でる。

つつい洗った気になって忘れがちになってしまう生え際や耳の周り、後頭部は入念に。

鋭い爪のせいでやりにくいそうだが、ベッドスパまでしてらっしゃる?!

「……………」

ポケモンだよ？それも半二足歩行とはいえ獣型のポケモンだよ？なのに、何でポケモンがそこまで入念に髪洗いしてんの?!

しかも仕草が一々色っぽい!!耳元の生え際をかき上げるんじゃない!!うわ、シャンプーもリンスも使っていないのに髪の毛の引っかかりが無い!!

「……………」

悶絶ものである。何故悶絶しているか私自身分からない。取り敢えず、絵面がシユール過ぎて悶絶していたという事にしておこう。

しかし、ポケモンも毛並みを綺麗にする為に努力してるんだなあ……………。

私もこの栗毛にはお母さんから褒められていて自信があつたが……………あるからこそ、これからはもう少し丹念に洗おう。

私は木陰で一人、そう決意していた。

キツネさんが川から上がってくる。こだわり抜いた洗髪も終わったようだ。

川から上がったキツネさんは……………身体をブルブルと降って体毛が吸った水気を飛ばす。

……………そこは、野生ポケモンぽいのね。

少し、ガクリとなる。何がどうかと言われたら分からないが、何かが萎えた。

そんな事をしていると、私はキツネさんに見られていることに気づいた。

「ーあ、ヤバイ。何が分からないが、何かがヤバイ。」

キツネさんが近付いてくる。

「え、えつとね。何時もの場所にキツネさんがいなくてね？何処行つたのかなーって探してたらね？水浴びしてるのを見つけちゃってね？」

私、タジタジである。

キツネさんはいつもの無表情で近付いてくるからマジで怖い。

「えつとね？だからね？その……ね？………ごめんなさい！！」

土下座を敢行しそう程の勢いの全力の謝罪。キツネさんが私の前で止まったのが気配で分かる。数秒間の静寂が本当に痛ましく、辛い。

ややあつてから、

『……………ハア』

というため息と共に『ゲシッ』と軽く足を蹴られた。

「ー見てんじやねーよ。」

そう言われた気がする。

キツネさんは、そのままいつもの大木の下まで歩いていく。

「……………ゆ、許してもらえた？」

おそらく、そうらしい。しかし、もしもの事はある。

「ー取り敢えず、明日はシャンプーとかリンスとかを持って行く。う。」

そう心に誓ってから私はキツネさんの後を追った。

更に暫くの時間が経つと、いつの間にか私はキツネさんのタテガミの洗髪とブラッシングを任されるようになっていたが、それはまた別のお話。

l i n t
n e r t
x e r l
t e u d
e e e
p i e
s o n
d o d
e l l

閑話②ー1 病床の小娘を探して・上

5

最近、娘の様子がおかしい。

朝早くに何処かに出かけて行き、空が夕焼けで紅く染まる頃まで帰ってこない。

娘の友人達に尋ねても、最近、会う機会が減っているそうだ。娘は何処で何をしているのだろうか？危ない事をしていないかとても心配だ。……………も、もしかしたら悪い男に引っかけかかっていたりして!？」

『ウニャー…………』

「レパル…………。どうしたの？貴方も心配なの？」

憂鬱な顔をしていたのを心配したのか、レパルと呼ばれた大型の猫ポケモンが私の頬を舐める。彼女は私が若い頃ーポケモントレナーだった頃からのパートナーにして、私たちの家族……………まるで豹のようなしなやかな躯体の猫型ポケモンーレパルダスだ。

「…………そうね。ここは母親として、一度キツチリ話を聞かないとね」
フンスツーと勢いよく鼻息を鳴らす私。

そのタイミングを見計らったかのように階段から聞き慣れた足音を立てて階段から娘ートウコが降りてくる。

そんな愛娘に母親は声をかける。

「あはよう、トウコ。…………早速なんだけど、少し話があるからー」

そこまで言いかけてから娘の顔を見て言い淀む。

「…………あ、おかあさん。…………おはよー…………」

その声に何時もの快活な雰囲気は無かった。寧ろ、覇気が無くどこか舌足らずに聞こえる。

更に、目が半分寝ているかのようにトロンとしており、顔も赤い。

「………………………」

「…………なに？おかあさん……………」

そんな娘に顔に手が伸び、お互いの額同士を合わせる。

ーむむ、これは…………。

「トウゴ。貴方、熱ね」

「……………ねっ……………」

どうやら、娘は風邪を引いたようである。

——（（〇））——

その日、ゾロアークは「もしもの時の為に」と常備している数々の木の実の中から腐ったりカビが生え始めた物の処分をおこなっていた。

そこで、

——最近、あの小娘が顔を出さない。

ふと、そんな思考が頭によぎった。

……………。

いや……………だからどうしたという事なのだが。

心配とかそういうのではないのだ。寂しいとかそういうものではないのだ……………が、

——全く、小煩いだけの小娘も居ないとなると……………どうにも気に入らない。

それに最近、あの小娘にタテガミの手入れを任せるようになってから毛並みが良いのだ。小娘が来ない間は自力で手入れを行なっているが、どうも納得がいかない。

——これは、俺のタテガミのためだ。断じて俺があの小娘を心配しているわけではない。

おもむろに立ち上がったゾロアーク。その周りに黒い靄が発生する。それが、大きさと密度を増し、ゾロアークの腕を包む。

黒靄が霧散し、そこにある腕は、明らかに本来のゾロアークの物とは全く違う物だった。黒と灰色の体毛が消えて失せ、代わりに白い肌と五本の指を持った腕がある。間違いなく人間の腕だ。

それを確認したゾロアークは更に力を込める。それに呼応するように黒い靄が大きさを増し、ゾロアークを包み込む。

そして、黒靄から一歩進み出たゾロアークの姿は間違いなく人間

だった。若干、紅のメッシュが入った黒の長髪。ポケモンとしての姿の時程ではないが、男としては十分に長い髪を後頭部で結んだ、まだ20歳に満たないであろう青年といった風態。

「ゾロアークの特性『イリュージョン』。自身の外見を自由に変える事のできる ばけぎつねポケモン」というゾロアークの分類そのものを体現した能力である。

ゾロアークは普段この能力を使って人の中に溶け込み、生活をすることもある。……まあ、それも今の逃亡生活を余儀無くされるまでの間だったが。ゾロアークを追っている連中はどうも彼のイリュージョンを見破る手段を得ているようで何度かそれで見つかっている。「久しぶりに人間の姿になったが、おかしな所は無さそうだな」

頭部に耳は残っていない。爪も人間のものだ。——ただ、どうしても目付きの悪さがポケモンの姿同様に人間の姿に色濃く影響を受けている。

「あとは……」

と言つて、また黒い靄から衣類といった身に付ける物も生成している。これは、『イリュージョン』の応用だ。流石に裸で人里に降りるのは憚られる。

生成した物はどれも黒と赤を基調としている。その服の袖に腕を通し、スポンを履き、身支度を整える。

「これで問題無いだろう」

ああ、その通りだ。問題無い……そのお面が無ければの話が。

顔の上半分を隠すように被られたのは黒の狐面。ゾロアーク自身を模したのか、目尻に隈取のような模様が入っている。これは、何度試しても治らなかつた鋭い目付きへの対策。こちらの方が目立つのだが、逆に周りが警戒して近付いてこず初対面でいきなり人間の子供に泣かれるという事態が減った為にゾロアークが採用している。

「する必要はないが、様子を見に行くか」

全くもって必要はないが——と誰もいないのというのに誰かへ……あるいは自分自身に言い聞かせるように呟くと、彼の姿は森の中に消えていった。

「え、えつとね……あそこにね。知らない人がいるだよ。それでどうしたのかなあ？つて」

「んあ？お、本当じゃねえか。……どれ、ちよいと声をかけてくるか」
カルカはベルに言われた男を見つける。あのお面が見るからに怪しいが、カルカはあまり気にならないようだ。

「え？」

カルカはベルの腕を掴み、グイグイと男の下へ引つ張っていく。

「なんだ？声かけたいんだろ？」

「え？……ちよ、違ッ?!……ふええええ!!」

——（（○））——

——ふむ、これは困った。

人に化けたゾロアークは一人、カノコタウンの中で偶然見つけた高台で海を眺めながら今後の行動を考えあぐねていた。

——村に入れば、何だかんだ会えるものだとばかり思っていたが……。

全くそんな事は無かった。村に入ってからしばらくの間徘徊していたが、歩けど歩けど知らぬ顔ばかり、小娘には全く会えないでいる。というより、行き当たりばったりにも程がある。

——今後どうするか……。

この村からゾロアークのいる空き地までの道程で何かしらの問題に見舞われたのかとも心配したが、村ではそのような騒ぎが起こっていない以上杞憂だろう。

——………………い、いや誰もあの小娘の事など心配していないからな！

自分の中で沸き起こった「安心した」という感情を全力で否定するゾロアーク。

そんな事をしているとゾロアークに声がかけられた。

「よお、兄さん。こんな辺鄙な村に用でもあんのか？」

ゾロアークは声をした方を見る。犬のようなポケモンを連れした男

とそれに半ば引きづられるようにして歩いて来た少女だ。男の方は今のゾロアークと同年代、少女の方は「あの小娘」と同年代といった所か。

流石に、話しかけられた相手にいつまでも仮面を被ったままなのは失礼だと分かっているゾロアークは振り返ると同時に面を取る。

少女は、ゾロアークと視線が合うと、酷く狼狽する。解せぬ。

「おうおう、兄さん。そんなに睨みなさんなや。……ベルってんだが……この娘が怖がっちまてるじゃねえかよ」

「ー睨んどらんわ、失敬な。」

そこで初めて人間体ゾロアークの三白眼が不快気に細められる。

「……目付きの悪さは生まれつきだ」

「ん？ああ、そうかい。そいつは悪かった。……ベル、その兄さんは怒ってないってよ」

「う、うん……」

そんなやりとりを黙って見ていたゾロアークはおもむろに要件を聞く。

「……で、何の用だ？」

何かしら用事があったから、話かけてきたんだろう？、とゾロアークはたずねる。

「用って程の事じゃあねえんだが……。どうも、俺たちには兄さんがお困りのように見えてね。ここは村の者として何か助けになれないかな、と思ってるね」

青年の言葉にゾロアークは多少の迷いを覚えた。しかし、結局それを「渡りに船」と考え直し、言葉短かに話す。

「……人を探している」

「へえ、人を……か。なら安心だ。ここは世間が狭いからな。村の連中なら皆知り合いだ」

で、探してる奴っての誰なんだ？と聞かれ、ゾロアークは口を開きかけるも、そこで止まる。

「ー名前……。そういえば、あの小娘の名前は何だったか……」

「小娘」としてしか覚えていなかったから名前なんぞ記憶していな

い。

「…………いや、言っていた気がする。初めて会った時に勝手に自分の名前を言っていた筈なのだ。」

「…たしか、「小娘」の名前は……」

「…………トウ…………コ、だ」

ほとんど記憶の片隅に埋まっていたその名前を引っ張り出す。

その名前に少女はピクリと反応するが、それだけ。

「トウコちゃんか。ははーん、さては兄さん。兄さんはトウコちゃんのお見舞いに来たんだな。…………ん？わざわざ外から？」

青年は自分の言った内容に違和感を覚えたようだが、それが疑問になるより早く、ゾロアークの質問が耳に届く。

「…………お見舞い？」

「なんだ、兄さんは知らなかったか。どうもトウコちゃん、数日前から風邪で寝込んでいるそうなんだわ」

「…あの小娘が風邪。」

ゾロアークは小さな驚きを覚えるが、逆に納得もした。どうりで来ない訳だ、と。

「成る程、大体分かった。情報感謝する」

「あの小娘が来ない理由が分かればそれで良い」とばかりに、青年に礼を言って、空き地に帰ろうとする。しかしー、

「待とうや、兄さん」

と、呼び止められた。

「…………何だ？」

「いやあ、兄さん。兄さんはトウコちゃんの家分からだろう。良かったら案内してやんよ！」

そういう提案をされた。しかし、ゾロアークとしてはそこまでするつもりは無い。

「…………いや。だが、あの小むートウコは風邪なのだろう？ならば邪魔をして、風邪を悪化させる訳にもいかないだろう」

やんわりと「お断り」しようとするも、青年の親切心はそれを理解しなかったようだ。

「いやいや、わざわざ外から訪ねに来たんだろ？なら、お見舞いくらい行っても文句なんてねえだろうさ。さ、とつとと行くぞー」

親切の押し売りと言うのだろうか、これは……。

余計なお世話だと切って捨てる事もできるが……いつも楽しそうに何かを話している小娘が風邪で寝込んでいる。それを見ているのも一興、と考え付いて行く事にした。

「あ、そう言えばさあ……。オレ、兄さんの名前聞いてなかったわ。コイツはさつきも言ったが、『ベル』。オレは『カルカ』。兄さんは？」

狐面を被り直したゾロアークはそれに喉を詰まらせる。

「ーそういえば、名前を考えてなかった……。」

自分の考えの至らなさに苛立ちを覚え「……チツ」と舌打ちを打つ。

「……………ラク、だ」

「ゾロアークだ」などとポケモンの名称を名乗る訳にもいかい。

安直だが咄嗟に思いついた名前をゾロアーク……いや、ラクは名乗った。

l t o b e c o n t i n u e d |

「カルカ君にベルちゃんじゃない。どうしたの？またお見舞いに来たの？」

カルカが「うっす」とラーク、ベルという少女が「こんにちは」と挨拶すると、トウカと呼ばれた女性はニコニコと笑っている。

その姿はどことなく小娘と似ているように感じ、やはり親子なのだな、とラークは確信を持つ。

「まあ、そうなんすけどね。……でも、今回は俺たちじゃなくて、後ろのお兄さんがーがってのが正しいッス」

と言つてカルカはトウカの視線を妨げていた自身の身体を避ける。そこで初めてトウコの母親ートウカと人間体ゾロアークーラーの視線が合う。

「……初めて見る顔ね。一体どなたかしら？」

ー小娘の母親の視線が鋭くなった？……解せぬ。

目付きが悪い事を自覚しているラークは、当然初対面で何度となく「損」をしている。が、ここまであからさまな……敵意にも似た視線をいきなり叩きつけられたのは流石に 初 の事である。

ラークはまさか『イリユージョン』がバレたのか、と警戒する。

その剣呑な雰囲気を感じ取ったらしいカルカは、

「こ、この人はラーク。どうやら、トウコちゃんと『お友達』らしいッス。……で、ではオレはこれで!!」

「おい、ちよつとー」

ちよつと待て。一体誰と誰が『お友達』だつて？ーそう言つてやりたかったが、すでにカルカは足早にその場を去つて行つた後だった。

ーあの男、逃げやがった。

別にそれ自体を責める気は無いが、せめてそのベルとかいう少女も連れ出してやるべきだろうに。

哀れな少女は、まだ何も分かっていないのか、「え？、え？」と小さくなつて行くカルカの背中を見つめて困惑している。

「もう、カルカ君は本当にせつかちなんだから。ここで立たせるのも何だし、ベルちゃん……それにラーク君も中に入りなさい。私、貴

方に聞きたい事があるの?」

この辺りで残された哀れな少女も違和感に気付いたようだ。なんせ、トウカという女は笑顔だというのに目が一切笑っていなかったからだ。

ー(())ー

ーええ、そうね。やっぱり、そうだったのね。

突然、トウコを訪ねて来たという狐面の『お友達』。当然、このような目立つ風態の男、村にはいない。つまり、カノコタウンの外の人だ。それに最近、娘の帰りが遅く、娘の幼馴染達はトウコの行方を知らない。

ー間違いない。この男は、娘のボーイフレンドだツツ!!

それなら、最近の娘の行動の謎にも納得がいく。いや、いつてしまふ、というべきか。

ー10歳程度の差は十分にあり得るツ！実際、私と旦那は年の差婚だしツ

ーあり得てたまるか! (by作者)

冷静に考えて見てほしい。男ーラークの外見年齢は20歳手前といった所。そして、トウコは8歳。その差10歳以上である。

勿論、20歳と30歳の男女の関係は十分あり得るだろう。しかし、20歳手前と8歳は流石におかしいだろう。20歳と30歳の差は1.5倍に対して、仮に18歳と8歳ならその差は2倍以上。同じ10歳差でもその意味は大きく変わってくる。

それに気付かない辺り、トウコの思考は暴走気味だ。

だが、だがである。この場合に限って言えばー。様々な不確定要素込みで言えばー。

ーあながち間違いじゃないんだよなあ…… (by作者)

作者は、主に第1章の2ー1〜2ー4のエピソードを見ながら溜息を吐いた。

閑話休題。

そんなトウカの暴走気味な思考をとどまるところを知らない。

トウコ「お母様、わたくし このラークさんと添い遂げますわ」

ラーク「義母様、俺は必ずトウコを幸せにしてみせます！」

トウコ& amp・ラーク「だから、お母様（義母様）。さよくなら〜！」

私「待つてえ！トウコ！お母さんを置いて行かないでえー！」
などという謎過ぎる茶番劇的未来絵図を描き始めてたトウカは顔を青くさせる。

「いいえ、駄目よ！そんな事、認められないわ！」

トウカは（自身の脳内でのみ）目を赤く燃やす。

「娘の純潔は私が守ってみせるッ！こんな何処の馬の骨とも知れない男に娘は傷つけさせないわッ！」

トウコの思考は家族愛で燃えていた。

トウコ（〇）トウコ

「下が……何か凄い事になっているわね。」

病床に伏せるトウコを甲斐甲斐しく世話をしながら、トウカのポケモン「レパルダスのレパル」は感じ取っていた。

別に下が煩い訳では無い。ただ、並々ならぬ圧力を下の階から感じるのだ。

「うわー……行きたくねえー……。」

大体、その発生源に予想がつくレパルは急に精神的な疲れに襲われた。

「アレの暴走を止めるのはレパルの役割だが、非常に疲れるのだ。………何故か。」

「下がどうなってるこ分からないけど………取り敢えず、私も覚悟を決める時間が欲しいわ。」

尚、ややあつて決まったのは『覚悟』ではなく、『諦め』だった模様。

トウコ（〇）トウコ

「ーなんだ、この状況は……。」

辟易とするラークは謎の疲れに脅かされていた。

1つの丸テーブルを囲うように三人の男女がいた。

一人は、狐面を外した人間体ゾロアークこと、ラーク。

一人は、その対面に背後に謎の『使命感』という炎を燃やすトウコの母ートウカ。

一人は、その熱気に燃えるトウカにも、初対面のラークにも近づき難い雰囲気を感じ、どちらからも離れどちらから見ても等距離の所に座る涙目のベル。

三人は丸テーブルを間に挟み三角形をを描くように座っていた。

「……………改めて自己紹介させてもらおうわね。私はトウカ。トウコの母親です」

憎つくき男の前に、殴り付けたい衝動を堪え改めての挨拶から入るトウカ。

落ち着け、ママさん！これはボクシングではない。会話だ！

「ラークだ」

辟易としているラークは言葉短かに名乗る。……………あ、辟易としてなくともこんな感じだったわ。

「……………ベルですう」

この状況に耐えかね、目を潤ませて答えるベル。もう、帰らせてやれよーと自己中心的なラークが他人を慮る程度には痛々しい。まあ、そのラークも思うだけで行動はしないのだが。

「……………そう。それでラーク君は、わ・た・し の娘と一体どういう関係なのかしら。一応、『友達』と聞いているけど、貴方の口から聞きたいわ」

まずは小手調べと言わんばかりの軽いジャブ。本当は蹴り飛ばしたいのだが我慢を重ねるトウコ。

落ち着け、ママさん！これはキックボクシングでは無い。会話だ！

それに、ラークは考え込むような仕草を取る。

ーあの小娘との関係。それは一体何なんだろうか。

と。

そのまま考え込んだまましばしの時間が経つ。そして、おもむろにトウカへと向き直り、

「……………初めに言っておくが、俺はあの小むーとトウコと『友達』では断じて無い。アレはカルカとかいう男が勘違いしただけだ」

いきなりの『トウコ』呼びにとうの額に青筋が浮かぶのを見てしまったベル。もう良い！君は直ぐに帰るんだ！

「俺とトウコはー身体を洗ってもらおう関係だ」

「ツーーーッツ?!」

ーラークの一撃。トウカには効果は抜群だ!!

その答えにトウカはよろけ、ベルは顔を朱に染める。

「へ、へえ……………そ、そうなの」

「ああ、そうだった。……………ついでにその後の『手入れ』もして貰っている」※『ブラッシング』の毒です。

「ー□*☆\$・%×<ツツ?!?!?!」

「?」

ーラークの追撃。トウカの急所にも当たった!!

流石に「隠語」の概念が無い8歳児のベルには何を言っているか分からなかったようだ。

「……………む、どうした?……………むむ、意識が」

「……………き、気絶してる?」

「……………」

しかし、トウカには絶大。どうやら、この戦いラークの「1・2ラッシュ」でストレート勝ちのようである。

ラークにもベルにも何故、トウカが意識を失ったか分からないようである。取り敢えず、近くのソファに寝かせる事にする。

ソファに横たえたラークはベルに向き直る。

「今日はすまなかった」

と謝った。

「……………え?」

困惑するベル。ついでに作者も困惑してる。

——今、あの男……私と会話していなかったか？

振り向くが、そこにはトウコの部屋へ通じる扉しかない。

——まあ、気のせいでしょう

レパルは向き直り、下へと降りていく。

……………

——え、何？これ？どういう状況？

レパルが下に降りた先で困惑の声を上げるのは言うまでもなかった。

——（（○））——

「おい、小娘。来てやったぞ。……………む」

トウコの部屋で『イリユージョン』を解くかどうか迷っていたラークは、トウコが寝ている事に気付いた。

「なんだ、寝ているのか」

寝息も安定しているようで、風邪もほとんど治まりかけらしい。

ラークは部屋の中にあつた椅子をトウコの寝るベツトの上に乗って運び、ドカリと座る。

そして、ハア〜と息を吐く。

——今日は疲れた。

「小娘、貴様が最近あの森に来ないせいで今日は本当に疲れたぞ」

——本当に。これはあの連中に追い回された時以上かもしれない。

一瞬の静寂。トウコのスピー、スピー……という寝息が部屋を支配している。

「おい、分かっているのか？貴様。俺が『連中に追い回されている時よりも』と言うのだから、相当だぞ」

幸せそうな寝顔が少しラークの瘰に触ったのか、その頬を指でつつく。少し、寝苦しそうだ。

「だいたい貴様は、毎日毎日あの森に来るくせにして……」

プスプスと突きまくるラークの小言はそこで止まる。

「……………キツネさん……………あしたは……………あいに……………」

いくから……………」

トウコの寝言らしい。

それを聞いて、ラークのつつきはピタリと止まる。それからややあつて、溜息。

そして、狐面を少し下へとズラしー

「…………… 貴様というヤツは…………… もう、好きにしろ。
…………… 待っているからな」

その時の表情は、長い髪と狐面で隠され、誰の目にも入る事はなかった。

「さて、帰るか」

ーあの森に

そう言いかけて、ピタリと動きが止まる。

ー帰るには、下に降りる必要がある。

ラークの頭に小娘の母親の顔が思い浮かぶ。

ー降りる？下に？

…………… 控えめに言つて、凄く、嫌だった。

ー…………… ー

風がトウコの鼻を撫る。それがこそばゆかったのか、鼻を掻きあくびをする。

「ん。んー…………… よく寝た…………… ってもう夜じゃん！」

トウコがベットの所で大きく伸びをして、辺りが暗くなっている事に気づく。

「あ…………… そう言えば、最近キツネさんに会えてなかったなー。ベルたちはお見舞いに来てくれたけど、流石にキツネさんはねー」

来れないと思うし、来ないと思う。そんな事を「あははー」と笑いながら周囲を見回し、やけに明るい月光によって何かの影が視界に入る。

「…………… こんれって、木の実？」

ベットの近くに不自然に置かれた椅子。その上に木の実が小さな

山を作っていた。

トウコはそれを一つ手に取る。

「……………いや、まさかね」

そう呟いたタイミングで夜風がトウコの部屋に入り込んだ。

「ヒヤッ!?……………もう、なにー?寝る前は窓閉めてた……………はず……………」

そこまで言いかけて、何かを考え込むトウコ。その後、フフ……………と小さな笑みを浮かべる。

トウコは大きく開かれた窓から外をーキツネさんがいる森の空き地の方角を見つめる。

「……………お見舞い、ありがとうございます」

手に取っていた木の実を口に運んだ。

「……………うん、甘酸っぱい」

夜というのは深く、暗い。それは人工の光が少ないカノコタウンではより一層だ。

しかし、その夜は月の光がいつもより強かったのか、小さな実を頬張る少女の姿を淡い光が灯していた。

l i n t e r l u d e e n d |

l n e x t e p i s o d e |

2-1 貴方の名前は何ですか？①ーRAINYー

7

私がああのポケモンーキツネさんと出会ってから、もうすぐ2ヶ月が経とうとしています。

この時期は雨が多く、キツネさんに会える機会が減り少し憂鬱な気分です。

私は雨粒が流れ落ちる窓越しに、ここからは見えない大木の空き地に想いを馳せる。

キツネさんは今頃どうしているのだろうか……。

あの木の下で雨宿りしているのだろうか？水浴びしても濡れた毛が鬱陶しくてイラついているのだろうか？

「……私と会えなくて寂しい……って思ってくれていたらー」
思ってくれていたら、どうなのだろう。

……………

……何かこれ以上この事を考えると色々引き返せなくなりそうなのでやめよう。

えっと、何の話だったか？ああ、そうそう「私はキツネさんの事をあまり知らない」って話だった。

え？違う。いやいや、大体合ってると思う……よ？

「そう言えば、私……キツネさんの本当の名前も知らなかったんだ……」

キツネさんの事で知らない事が分かれば、それが何であれ知りたいと思ってしまう。

ー知りたい。知りたい。

とめどない。ただ、私の中でよく分からない感情が暴れ回る。

ー私は「キツネさん」が知りたい。「キツネさん」に私を知ってもらいたい。

「あ……知ってもらうのは難易度が高そうかも。私が何話しても無視するか舌打ちするかもん」

これはキツい。取り敢えず、知ってもらうのは後にしよう。そうしよう。

「キツネさん、……………」

その言葉は、届かない。

「キツネさん」にもー。

大木の空き地にもー。

距離という壁に邪魔される事さえなくー。

引つ切り無しに降り注ぐ雨音にも邪魔される事さえなくー。

ートウコの感情は窓に当たって床に落ちた。

誰にも届かないこの言葉を窓に映った私だけが聞いている。

ーー会いたい。会いたい。

この小さな願い事のような想いが、「あの日」を引き起こす引き金になる事をトウコは知らなかった。

ーー()()ーー

「いやはや、昨日まで雨続きだったからちよつと憂鬱だったけど、わたしの記念すべき第一歩であるこの日が晴れで本当に良かったわー！」

女性の声とする。

その女性は20台半ばといった所だろうか？膝上の丈の短いタイトスカートを履き、女性物の上着の上からサイズの大きい白衣という随分と目立つ出で立ちの女性だ。

「あららっ……こつて何も無い辺鄙な村だとばかり思ってたんだけど……意外とそんな事無かったわね」

その女性を知る人は誰一人としていない。当然だ。この女性は今ノコタウンに今日越してきたからだ。

「さーて、この村は一通り見た事だし。わたしの研究所に向かいましょうか？」

彼女の名前は、アララギ。ポケモンの起源について研究しているポケモン博士である。

「……………研究所って何処かしら？」
……………ポケモン博士である。

l t o b e c o n t i n u e d |

2-12 貴方の名前は何ですか？②
I N F E R M
A L I

8

その日は、雨季の時期としては珍しい晴れ模様だった。
その日を待ってましたと言わんばかりに駆ける少女がいる。トウ
コだ。

行き先は決まっている。「キツネさん」の居る大木の空き地である。
1週間か2週間か……それだけの間溜めに溜めた思いが一気に外へ
と飛び出し、一直線にキツネさんの下に走る。

ウツキウキである。雨季だけに。

……………。

……………。

……………失敬。

まあ、そんな訳で水たまりを飛び越え、柵を飛び越え、上機嫌にカ
ノコタウンを駆け抜けていく。

そして、いざ一番道路につ、というタイミングで彼女の手を捕まえ
て止める女性がいた。

「ちよつと、貴方。何処行くの？そこから先は野生のポケモンがいる
危険な所よ？」

「お姉さん、誰？」

初めて見る女性だ。少なくともカノコタウンの間人では無い。

「お姉さん？お姉さんはアララギって言うの？今日、ここに越してき
たの。よろしくね」

アララギと名乗る女性は「ハイイ！」と手を上げてニツコリと笑っ
ていた。

—————
—————

「あそこに見える大きな家が村長さんの家。よく分からないけど、後であいさつしに行った方が良いと思う……………思います」

「そうだね。先に引越し先に送った荷物の中に菓子折りを入れてたから、後で挨拶に行きましようか！」

数十分後のカノコタウンに2人の人影が歩いていた。トウコとアララギだ。

「いやあ、助かったよ。イツシュ地方の端の方の村だつて聞いていたから、小さい限界集落みたいなのを想像してたんだけど……………思ったより広くて、私一人だと絶対に迷っちゃってたわ」

アララギと名乗る女性は快活な笑みを浮かべトウコの隣を歩いている。

話を聞くと、どうやらこの村に引越して来たのは良いもの、引越し先が分からなくて困っていたようだ。

何処に向かえば良いのか分からず、入り口で困り果てていた所に偶然通りかかったトウコを見つけて呼び止めたのだ。

「ありがとね、トウコちゃん。引越し先どころか、この村全体の案内まで引き受けて貰っちゃて。いやー、お姉さんは嬉しいわあ」

「……………」

何処かわざとらしさが残るアララギの言葉に、トウコはカチンと小さなイラつきを覚える。

そのイラつきには理由がある。トウコを呼び止めたアララギは早速道案内を頼んだんできたのだ。

それ自体に問題は無い。だが、「キツネさん」に会うつもりだったトウコはその頼みを洩ったのだ。ここしばらく会えていないという事実もあり、本当に迷ったのだ。まあ、悩みに悩んだ末に、困っているらしい女性を見捨てる事をトウコは良しとしなかっただろうが。あろう事に、アララギは洩るトウコの耳元で「村の外に出ようとした事は黙っておいてあげるから」と囁いてきたのだ。

そこでトウコが動揺してしまったのも悪手だった。それによって「村を子供だけで出る事がいけない事」で「それを大人に黙ってやって

いる事」を悟らせてしまった。

「悪い事」をしていたのは事実だ。しかし、なんだかんだアララギの頼みを引き受けるつもりだったトウコにとって、このような脅しを受けて良い感情を持つ筈も無い。

「…………アララギさんは何をしている人なんですか？」

本人は隠しているつもりなのだろうが、言葉の端々から感じれる不機嫌な雰囲気、苦笑を隠さないアララギ。同時に何だかんだ丁寧な道案内してくれているトウコに好意を持ち始めている。

「うーん。そーだねえ…………。まあ、簡単に言えばわたしはポケモンの研究をしているの」

「ポケモンの…………」

「そう。言っちゃえば『ポケモン博士』だね」

それを聞いたトウコは押し黙り、何かを考え込むような仕草を取る。それに気付いたアララギは「どうしたの？」と聞く。

「ポケモン博士って事はポケモンの事は何でも知ってるって事ですか？」

「え？うーん…………。そうね、何でも知らないかな？ポケモン博士って言うのはポケモンについて分からない事を調べて『分かる』ようにする人の事だからね」

それに私はポケモン博士に成り立てのペーパーだからね、と笑う。

「まあ、それでも普通の人よりは知っているって自信を持って言えるわね。…………トウコちゃんはポケモンについて知りたい事があるの？」

ある。とてもある。たった一種類…………いや、たった一匹のポケモンの事だが、全ての事を知りたいと思うポケモンが居る。

「居ます。…………一匹だけ」

「もしかして、それって村の外に出ようとしてたのと関係ある？」

「……………」

「やっぱり…………と言う事は野生のポケモンね」

パンツと手を合わせてズバリと正解を当てていくアララギ。

……………何も言っていないのに直ぐにバレてしまった。

「うーん、この辺りに群生する野生ポケモンについての資料ってあったかしら？……取り敢えず、帰ってから調べましょうか」

「調べてくれるの？」

「ええ、勿論よ。……この村を案内してくれた後にね」

「言われなくても案内はしますよ」

一番初めのやりとりもあつて、アララギの一挙手一投足にイラつきを感じているトウコ。

しかし、アララギはそれ以降の案内の声に若干の弾みが戻っていたのを目ざとく気付いていた。

ー（（○））ー

トウコとアララギの二人は、アララギ博士の研究所となる引越し先に行く前に、最後の案内先としてカナコタウン最南端に足を運んでいた。

そこはイツシュ地方東南端の海を一望できる見晴台だ。

「地図見た時から随分と端の方にある村だと思ってたけど、まさか海に隣接してるとは思わなかったわ……」

その先には何もなく、見渡す限りの全てが青。空の青と海の青が同化して水平線が何処かさえ分からない。

「ねえ、トウコちゃん！下に降りてみない？ちよつと海の上を歩いてみたいわ！」

喜色満面の表情のアララギ。

「いや、ダメですよ。昨日まで雨降ってたんですから」

遠くを眺めているとそれ程でも無さそうだが、砂浜近くの波は荒い。

「あーら、それは残念。……じゃあ、夏と一緒に海水浴に行きましょうか！」

「え？私もですか？」

「当然じゃない。ね？いいでしょ」

一体何処らへんが同然なのか……。トウコは深く考えるのをやめ

「おー、怪しい人発見！」

トウコに抱きつくアララギを見たベルの第一声である。

「あ、あや……」

人懐っこい笑顔の少女に言われたアララギは口元を引くつかせる。トウコとしても普段のベルからは聞けない言葉に小さな驚きを覚えてる。

「ベル、いきなり失礼だよ。……否定はしないけど」

「トウヤ、お前もだ。……ぼくもそう思うが」

ーチェレン、お前もか。

ベルの言葉にトウヤ、チェレンが同意する度にアララギの口元のヒクつきが大きくなる。いいぞ、もっとやれ。

しかし、そんなに怪しいだろうか？と自身に抱きつくアララギを改めて見つめるトウコ。

イツシュ地方の端という事もあり、どうしても閉鎖的になってしまいうカノコタウンに現れた見知らぬ女性。しかも、その女性は何故かサイズが身の丈にあつていないダボダボの白衣を羽織っている。

ふむ、これで「ポケモン博士」だという事を知らなければー

「確かに怪しい」

「トウコちゃん!？」

アララギ博士に味方は居なかった。

ー((((()))))ー

「えつとね、3人とも。確かに、この人は変な格好してるけど、怪しい人じゃないんだ」

8歳児7歳児4人からの不審人物扱いは堪えたのか、アララギはトウコの後ろで小さくなつて「の」の字を書いている。背後から「シクシク」と聞こえたのは気のせいだとトウコは自身に言っけて聞かせる。

「そうなの？じゃあ、このお姉さんは誰なの？」

「え、えーと……この人はね……」

そう言いながら、アララギの肩を揺さぶる。

「…………え？あ、何？」

「…………自己紹介。まさか、私にさせる気じゃ無いよ…………ですよね」

こういう時、互いを知っているトウコがしても良いが、ある程度溜飲が下がったとは言え好意を持ってない相手にそこまでするつもりは無い。

自身の紹介を任されたアララギは其れもそうだと立ち上がり、改めて三人の前に立つ。

「うっうん…………えーと、わたしはアララギ。ポケモン博士をしているの。…………実は今日ここに越して来たばかりで、偶然出会ったトウコちゃんに道案内を頼んでたのよ」

アララギの自己紹介を聞いて、トウヤが代表するように一歩前に出る。実際、幼馴染4人の中で一番社交的なのはトウヤだから、適任だ。「ポケモン博士ですか…………。あ、僕の名前はトウヤです。後ろの二人は女の子がベル、男の方がチェレンです。トウコとは三人とも幼馴染です」

トウヤの後に続いて、「ベルです」「チェレンです」と二人が簡単に自己紹介をする。

「トウヤ君にベルちゃんにチェレン君ね。さつきも言ったけど、わたしは今日からこのカノコタウンでお世話になるから、今後ともよろしくね」

ベルがトウヤの背後で「怪しい人じゃなかったんだねえ」と呟き、トウヤとチェレンも「そうだね」と小声で同意する。

たとえ小声でも本人の前でする会話じゃないだろうに…………。

やはり、本人に聞こえていたらしく、アララギ博士の笑顔に一条の亀裂が入っている。

「ちよつと、トウヤ。流石に『怪しい』とか『怪しくない』とか言い過ぎじゃない？まるで、不審者でも探してるみたいじゃない」

幼馴染として流石に失礼過ぎると思ったのだろう。珍しくトウコが諫めにかかる。…………人の事言えないのだが。

しかし、

「え、トウコ知らないの？最近、出ているらしいよ不審者が」

「え……？」

トウヤから予想外の返答が返ってきた。

「ねえ、トウコちゃん。どうして今わたしを見たの？」

他意はありませんよ。トウコはトウヤたちに向き直る。

「え？本当にいるの？この人じゃなくて？」

「うん、そうらしいよ。何でも、変な服着た集団が隣のカラクサタウンで出たらしいよ」

「……ふーん、じゃあアララギさんじゃないのか」

集団では無いし。

「ねえ、さつきからわたしに厳しくない？トウコちゃん」

これは本当に小声。アララギ博士の言葉はトウコにしか聞こえなかつたらしく、トウヤが話し始めた時点で無視する。

「まあ、注意しとこつかつて話だよ。それよりも、まだアララギ博士さんの案内をするの？良ければ、手伝うけど」

トウヤの提案は有難いが、正直もつと早くに言って欲しかった。厳密には私がアララギさんと出会ったタイミング辺りで。

「大丈夫だよ。あとはアララギさんを引っ越し先に案内するだけだから。もう、場所も分かっているしね」

カノコタウン中の案内を頼まれる前に聞いていたのだが、トウコの自宅の近所だった。

「そっか。……あんまり、関係無い人が大人数で押しかけるのもどうかと思うしね。じゃあ、僕は僕の家にいるよ。案内終わったら来てくれていいから」

「うん、分かった。時間があつたら行くね」

「あはは、ごめんね。まだ荷物の整理も終わってないからねえ……。一段落ついたら、皆を歓迎するわね」

そのアララギの言葉を最後に5人は別れた。

「じゃあ、行きましようか。わたしの研究所へ」

「分かりましたよ」

トウコとアララギ博士は最後の案内先である『アララギポケモン研究所』へ向かった。

があった。

「うわ、ホコリが一杯！ある程度は業者が掃除してくれているようだけど、改めて大掃除する必要があるわね」

確かにホコリっぽい。しかし、ここまで広い屋敷をアララギ博士一人で掃除するのは随分と大変そうだ。

「……………その大掃除って、まさか私を手伝わせたりとか考えてませんよね？」

トウコのジト目がアララギ博士の背中を射抜く。

まさに、トウコちゃんは手伝ってくれないかなあ、とか考えていたアララギ博士はグクツと一瞬身体の動きがぎこちなくなる。

「あ、あはは。まさかそんな事ないわよ」

「……………」

静寂が2人の間に生まれる。ややあってから、

「トウコちゃん！お願い手伝って!!」

手を拝むように合わせて頭を下げるアララギ博士。それを見たトウコはため息を吐いた後に了承の意を伝える。

「……………良いですよ」

「あれ、良いの?」

アララギ博士にとって、すんなりと了承を取れた事が意外だったように不思議そうな顔をする。

「……………まあ、ご近所付き合いは大切だと思いますし。……………どちらにせよ、私一人じゃどうしようもないからトウヤ達を……………いや、お父さん達を呼ぶべきかな?」

アララギ博士は尚も不思議そうだが、この話はそれだけで終わらなかった。後日になるが、その大掃除はトウコの家族だけでなく、庭の手入れも含めて、村人総出の一大イベントになった。これにはトウコも驚きの顔を隠せなかったという。

しかし、これは何もおかしい事は無い。ここカノコタウンはイツシュ地方の端にあるという立地条件などから村民は他の村に比べて非常に少なく、村落と呼ぶよりは開拓地に近い。だからこそ、何をするにも自分たちで行う必要がある、村人同士での助け合いがより強く

求められるからだ。

「ありがとうー!!」

トウコはアララギ博士に抱きつかれた。抱きつき癖でもあるのだろうかこの人は。

「……は、離れて……下さいッ!!……それよりも、約束守って下さいね」

そんな明日以降の事よりも優先すべき事がトウコにはある。

「はいはい、分かってるわよー。多分、研究資料の方は西側の部屋に置いてある筈だから」

そう言つて、一つの部屋のドアノブに手をかけて回す。

そこにはー

「え?この中から探すんですか?」

大量の段ボール箱が積み重ねられていた。

「そー……まあ、全部じゃ無いけどね!……さっそくですけどトウコちゃん。トウコちゃんの知りたいポケモンについて教えて!手がかりがないと探しようがないからね!」

探す以前に、資料の整理から始めないと駄目ではなからうか?そう考えるトウコであった。

l t o b e c o n t i n u e d |

2-3 貴方の名前は何ですか？③-NAME-

9

トウコにアララギ博士は言った。

「そのポケモンについて調べてあげると。」

「だというのに、だというのに……、」

「何で！私が！一人で！調べてるのよお!!」

アララギポケモン研究所の一室で、トウコの絶叫が響いた。

「……(○)……」

段ボールの中を覗いて見たら、その中は大量の紙資料だった。それも綺麗に整頓されておらず、その場にあつたのをそのまま詰め込んだかのように内容がバラバラだ。

「……調べるの手伝います」

これをアララギ博士一人に任せると日が暮れてしまう。……トウコが手伝いを申し出るのにそう時間を要しなかった。

「えっ……あ、うん。よろしくね」

そのおかしな言い淀みのあるアララギ博士の言葉にトウコは、

「……この人、手伝わせる気満々だったな。」

と、直ぐに思い至った。

「……まあ、そこまでは良い。そこまでは……まだ良い。問題はそこからだった。」

トウコは資料の整理をしながら、「キツネさん」と同種のポケモンを資料から探していた時、

「あー！そうだった!」

急にアララギ博士が立ち上がった。何か思い至る事があつたのかとトウコが期待の目を向ける。しかし――

「村長さんへの挨拶っ！忘れてた、早くしとかなないと！それにご近所

さん達にも！」

全く違う事だった。いや、確かに引越先でお世話になる近隣住人や代表者への挨拶は常識である。しかし――

「直ぐ行つて直ぐ帰つてくるから！」

「はあ……」

「トウコちゃん！暫く一人でよろしくね」

「……………」

そう言つてバタバタと出て行つてしまった。壁越しに「えーと、手土産のお菓子何処にいらしたんだっけ？」とか「あつたあつた！」とか……あと、物が落ちてくる音がしたが、最後に「行つてきます」の言葉と共に何も聞こえなくなつた。

「え、えー…………」

――（（〇））――

そんなやり取りがあつてから小一時間が経っている。

「……………帰つて来ない」

一体どこまで行つたのだろうか、アララギ博士が帰ってくる気配は無い。

「迷つたとか……ありそう」

――その場合、私の案内は何だったのか……。

仮定の話だが、そう考えるとフツフツと怒りが湧いてくる。

「何で！私が！一人で！調べてるのよお!!」

この辺りで冒頭に戻る。

持っていた紙資料の束を机に叩きつける。その衝撃が伝わったのか、まだ見えていない資料の山が崩れて床にぶちまけられる。

「あ……………やっちゃったあ……………」

トウコの声には反省の色はあるが、落ち着いている。

（ま、どうせ順番とかバラバラだったしね）

崩れた紙の山は直ぐに建て直せば万事解決だ。

座っていた椅子から降り、落ちた紙を手元で束ねていく。

「あれ？この写真……」

その中の一枚には写真が印刷されていた。

『キツネさん』……？」

本来の意味で「キツネさん」では無いだろうが、「キツネさん」と同じ種類のポケモンの写真だ。

それを見つけたトウコは、慌ててその紙を読む。

「ゾロ……アー……ク」

その中で一際大きな文字がトウコの目に写る。

「ゾロアーク。そう……『キツネさん』は『ゾロアーク』って言うんだ」

「ーやっと思つた。やっと思つた。」

トウコはその一枚の紙をととも愛おしそうに抱える。

「……そうだ。もしかしたら、落ちた紙の中に『ゾロアーク』について書かれているヤツが残ってるかもー」

その時、玄関先の方から音がした。

「アララギさんが帰ってきたのかな？」

足音がトウコがいる部屋に近付き……通り過ぎた。

「え？」

部屋を間違えたのかとトウコは戸を開けて声をかける

「遅いですよ、アララギさん。もう見つけてしまい……誰
ですか、貴方」

玄関先から入ってきたのはアララギ博士ではなかった。

「ん？お、おう!?……コイツあ驚きだ。まさか人が居るとはな……」

『……』

そこには、一人の男と一匹のポケモンがいた。

「ー（（○））ー」

「……誰ですか、貴方」

「ん？オレか？オレは……まあ、あれだ『ロブ』って事で」

何とも気の抜けた喋り方の男は、全体的に覇気の無い30代半ばと
いった風体の男。

そして、もう一人……いや、もう一匹というべきか。男の背後に――。

『……………』

緑髪の少女のようなポケモンが付き従っている。

ロブと名乗った男はトウコがそのポケモンを見ていた事に気付いたのか――

『……………ツツ!?!』

「!?……………な、何をツ」

――おもむろに蹴り飛ばした。

『何を?』……………自分で碌に挨拶もしない役立たずを蹴り飛ばしただけだが?」

驚くトウコを他所にロブはさも当然の事のように答える。その顔と言動には「間違った事はしていない」を通り越して「何をそんなに驚いているのか?」という困惑すら読み取れる。

「い、いや……………おかしいですよ! 何も蹴る事は無い筈です。口で言えば済む話じゃないですか!?!」

「……………は? 口で? オイオイ、変な事言うなよ。ポケモン……………動物相手に人間の言葉が通じる訳ねえだろ?……………ん? じゃあ、ポケモンが挨拶なんて出来ねえか。本当にグズだな、お前」

途中から、ロブの言葉はトウコから蹴り飛ばしたポケモンへと移る。

――気持ち悪い。同じ言語なのに話している意味が分からない。聞いていたくない。

だというのに、ロブは勝手に話を進める。

「あ……………で、何の話だっけ? ココに来た理由……………違う? まあ、気にすな、どうせ気になってたんだろ?……………実はオレは仕事でここに来たばかりなんだわ。それでもって、ここまで歩き詰めで疲れたし、『センサー様』からの目付役とも逸れるしで、休めるトコ探してた。……………んで、そこがココ」

おわかり? とどこか気の抜けた口調で語る。男の言葉はどこか自己中心的で自己完結的な為か、側から聞くトウコとしては話半分にし

か理解できない。

「……………ここは空き家じゃないんだけど」

「ああ、そうらしいな。庭が雑草だらけだったもんで、勘違いしちゃった」

何処か呆けたような喋り方。掴み所が無くていい態度。そして何よりあの目。こちらをを捉えているのに、まるでこちらを見ていない。霞んだガラス玉のような視線。それらがトウコを不快にさせる。

「あー……。お前さんはどうしてここにいるんだ？お前さんがこの家主って訳じゃあないんだろ？」

「……………その家主さんに頼まれてここに居るだけです」

「……………あ、そう」

「いい加減、帰ってくれませんか？これ、立派な不法侵入ですよ」

「……………しよーがねえか。悪い事はあんまりしちやいけねえもんなあ……………おい、行くぞ」

『……………』

自身の言った言葉の何が面白かったのか、皮肉げな笑みを浮かべた後、後ろのポケモンに呼びかけて男はトウコの背後にある玄関に向かって歩いていく。

男の足音が、コツ、コツとーとやけに明瞭に屋敷内に響く。

コツ、コツとー。

コツ、コツとー。

コツ、コツとー。

「……………何ですか？」

男はトウコの前で止まった。

「インやあ、大した事じゃない。…………ただ。その紙が見えちゃってな。それ、ポケモンの生態をまとめた資料だろ。なんでんなモンを持ってんだ？」

トウコは反射的に紙を隠す。『ゾロアーク』について書かれた資料を。

「……………この家主さんがポケモン博士だからですが」

「あー……………そうじゃないんだが……………」

なんでお前さんがソレを持つているかを聞いたんだが……」

「?、私がこの家主に整理を頼まれたからですが」

「ん、んー……………そうじゃねえんだが……………コイツはハズレか? ……………まあ、良いか」

そう言つて男は玄関から姿を消していった。

「気持ち悪い……………」

誰も居ない屋敷に、脱力気味のその声は溶けていった。

ー((O))ー

「いやー!ゴメンねえー!トウコちゃんに全部任せちゃって」

あれから更に30分程経つてやつとアララギ博士は帰つてきた。

「どうしたの?随分、疲れてる様子だけど……………」

「……………何でもないですよ」

ロボという男については話していない。怪しい事この上無かったが、物盗りという風でも無かった。そして、何より思い出したくない。「それよりも知りたかったポケモンの資料一枚だけですけど見つけましたよ」

「え、そうなの?一体どんなポケモンかお姉さんに見せてくれない?」

そう言われて、トウコはアララギ博士に『ゾロアーク』についてまとめられた資料を渡す。

「ふんふん、成る程……………。これまた随分と珍しいポケモンと出会つたようね」

「珍しいんですか?」

「ええ、確か一番最初に確認されたのがここイツシュ地方だったから、イツシュのポケモン図鑑に載っているけど、それ以降全く見つからないから幻のポケモン扱いされた事があつたのよねえ」

「幻の……………」

「まあ、結局アローラ地方つて所に相当数居たらしいから幻でも何でもなかつただけどねえ」

「へえ……………じゃあ、『キツネさん』もアローラから来たのかな?」

「それは何とも言えないけど、ここイッシュではまず見られないポケモンなのは事実ね」

ローゾロアーク……アローラ……

「良かったわね。捕まえたいポケモンの名前が分かって」
「え……………」

ローゾロアーク……アローラ……

その言葉が、トウコの耳に嫌に残り続けた。

l t o b e c o n t i n u e d l

2-4 貴方の名前は何ですか？④ーRELATI ONSー

10

ー捕まえる？

その言葉が嫌に耳に残る。

「あら、違うの？私、てつきりポケモントレーナーになってそのポケモンと一緒に旅をするのかなー、って思ってたんだけど」

一緒に旅をする。それはとても魅力的にトウコの耳の中で響き続けている。なのに、

ー捕まえる、ゾロアーク……『キツネさん』を……？

それは駄目だと私の何かが訴える。

何故だろう？『ポケモンを捕まえる』その行為を私は今まで何とも思わなかった。実際、今もその行為自体には忌避感はない。なのに、どうかそれを『キツネさん』に行うのは嫌だった。

「……どうしたの？」

トウコの様子がおかしい事にアララギ博士は気付く。堂々巡りを始めたトウコの思考は助けを求めるようにアララギへと向いた。

「アララギさん……。ポケモンを……『キツネさん』を捕まえずに旅をする方法ってあるのかな？」

「捕まえずにポケモンを？うーん……。物理的には問題無いだろうけど、それはとても不便よ？」

「どうしてですか？」

「まず、第一にポケモンをモンスターボールで捕まえるというのは、そのポケモンの所有権を得るって事なの。簡単に言うと、別の人がその『キツネさん』を捕まえたら、それは『キツネさん』が別の人の物になっちゃって……。なっても文句を言えないってことよ」

「……………」

「ポケモンセンター、ポケモンジム、ポケモンコンテストみたいなポケ

モン関連の施設の利用は軒並みアウト。……そもそも、個体によつて火を吹いたり、電気を放出したりする存在を首輪無しで人が住む所に連れて行く事自体が無理かも……………」

「そう……………ですか……………」

アララギ博士の言葉に顔を暗くするトウゴ。それを見かねてか、アララギ博士はトウゴに聞く。

「トウゴちゃんは、どうしてそのポケモンを捕まえたくないの?」

「……………さっきアララギさんは『首輪』と言いました。……………私はそれを『キツネさん』にしたくない……………」

してしまつたら、それは『キツネさん』との関係が飼主とペットに収まってしまうのではないか。そうなってしまうのが怖かった。

アララギ博士は

「あ……………成る程ね。これはわたしの言い方が悪かつたかしら。……………えつとね、トウゴちゃん。『ポケモンがモンスターボールに入っているかどうか』なんていうのはただの状態や形でしかないの。そこにどんは『意味』を作るかは貴方とそのポケモン次第なのよ」

「……………よく分かりません」

「そう……………。ちよつと難しかつたかしら?じゃあ、実演しちやいましょう。……………チラーミイ、おいで」

『ミイ!』

そう言つて、おもむろに白衣のポケットからモンスターボールを取り出し、投げる。出てきたのは灰色のチンチラのようなポケモンだ。

「アララギさんつてポケモントレーナーだつたんですか?」

「うーん、まあ、職業柄ね。というか、10歳以上なら誰でも試験を受けられるから、ある意味ポケモントレーナーでない人の方が少ないんじゃないかしら?」

チラーミイというポケモンは床から椅子、椅子から机、机からアララギ博士の腕へ移り、アララギ博士の頭に登る。そしてー、

『ミイ……………ミイ……………』

ペシペシとおもむろにアララギ博士の頭を叩き始めた。

「あらら、ずっとモンスターボールの中に入れてて怒らせちゃつたか

しら？ゴメンねえ、チラーミイ。……ボールから出すの忘れちゃった」

『……ミイツ!!』

ペシペシという音がベシベシに変わる。

「本当にゴメンねえ。……それよりもご挨拶。こちらトウコちゃん。トウコちゃん、こちらわたしのポケモンパートナーのチラーミイ」

トウコの耳に『パートナー』という響きが残る。

『ミィ……ミィー!』

アララギ博士の言葉でトウコの存在に気付いたのか、チラーミイはこちらに握手を求めるように短い手を伸ばす。

「……あ……えつと……どうも」

伸ばされた手を掴むように握り返すトウコ。

「チラーミイ、お詫びという訳ではないんだけど、この後、海を見に行かない？ヒウンシテイの海も良かったけど、コツチのは人工物が無いおかげか 砂浜があつたわよお！」

『ミィー!!』

チラーミイは嬉しそうにアララギ博士の頭の上で鳴く。それに満足そうな顔をしてアララギ博士はトウコに聞く。

「どう、わたしとチラーミイの関係って何に見える？」

「どう？と聞かれても……とても仲が良さそうに見えるが……」

「わたしとチラーミイは『飼い主とペット』？『持ち主と道具』？『友人同士』？『家族』？トウコちゃんには何に見える？」

『飼い主とペット』……違う気がする。

『持ち主と道具』……これは絶対に違う。しかし、チラーミイと先程の男と少女のようなポケモンを思い出す。

『友人同士』『家族』……ああ、何となくコレだ、と思う。

「トウコちゃんの答えは分からないけど……その顔を見たら悪い答えじゃなかったようね。……そう、わたしたち人間とポケモンの関係は千差万別。飼い主とペットも居るし、わたしみたいに十年來の友人にしている人だっている。……あんまり好きじゃ無いけど、当然ポケモンを道具扱いする人もいる」

アララギ博士は笑いながらトウコに語りかける。

「結局、その人とそのポケモン次第なのよ。それは人間同士でも変わらないでしょう?」

「そう……かもしれませんが、ね」

「ええ、そうなのよ! トウコちゃんはモンスターボールに入れる事を良しとしていないようだけど、所詮モンスターボールは、ポケモンとの関係を円滑にする便利な道具でしかない。入れたくないなら、必要な時以外ずっと外に出してあげれば良い話だしね」

アララギ博士の言葉はトウコの頭で綺麗に消化される。今までの悶々とした何かを含めて。

「……そうだ! いっその事、お願いしてみたら良いんじゃない? そのポケモンに」

名案だとばかりに手を叩くアララギ博士。

「お願い……ですか?」

「そうよ、そのキツネさんに『私のモノになって下さい』ってね!」

その言葉はトウコの頭を殴りつけるような衝撃があつた。自身の顔が熱くなるのが分かる。

「わ、私の………ッ!」

「あらあ、何を想像したのかしらあ? 顔を真っ赤にさせちゃって。おまえさんねえ、トウコちゃんは……。でも、間違いじゃないわ。人間同士でだってよくある事でしょ? 『俺の誰々』とか『私の誰々』って……みんな知らず知らずに他人を自分のモノにしている。なら、トウコちゃんがキツネさんにしちやいけないなんて事はないわ!」

確かに、『弱らせる事で抵抗力を奪ってから』捕まえる『のをしたくない以上、『お願いをして同意』を得るしかない。しかし――

――も、もうやめて! アララギさん! これ以上は聞いてもらえない!

「あ、アララギさんッ!! も、もういいです! いいですから!!」

「あ、あらら? ちょっとトウコちゃんにはデープ過ぎたかしら?」

……まあ、時間は一杯あるから考えてみなさい。どうせ、ポケモントレナーになるには、トウコちゃんの場合、どんなに短くても一年二

年必要なんだからね」

「………そっか、まだ時間はあるのか。」

「その間にじっくり考えておきなさいね」

「考える……」

「そうよ、その『キツネさんとの関係』………は一緒に居たら自ずと答えが見えてくるかしら？取り敢えず、トウコちゃんは『キツネさん』と何がしたい？」

何がしたい？それは決まっている。アララギ博士の話聞いてずっと耳で反響していた物がある。

「私は……『キツネさん』と『旅』をしたい」

「あら？答えはもう持つてるみたいね。じゃあそうね………今度は『キツネさんへの口説き文句』にしちやいましょうか」

「く、くど……ッ!？」

「一応、『キツネさん』と同じ種類のポケモンの情報を探すにあたって色々聞いたけど、相当な堅物さんよね？それを考えたら一年二年じゃ足りないかもしれないわ」

そこから始まった『アララギ流 男を落とす百の方法』なる謎の講義をトウコは顔を赤くしながら聞かされていた。

「相手、ポケモンなんですけど!？」というツツコミはその時ののぼせ上がったトウコの思考では思い至る事はなかった。

「………(○)……」

「今日は色々と助けて貰っちゃってありがとうね」

「いえ、私も知りたいことが知れたので」

今は正午はとつくに過ぎて午後2時過ぎだ。二人と一匹は、『アララギポケモン研究所』の門前に立っていた。

「私とチラーミーはこれから海を見に行くけど、トウコちゃんは どうするの？確か、お友達が待っているんだっけ？」

「そういえばそうだったな、とトウコは思い出す。しかし、今は………「いえ、出来れば今から『キツネさん』の所に行こうかと」

それを聞き、粘っこい笑みを浮かべるアララギ博士。

「あらあく、さつそく口説きに行くのかしら?」

「ち、違いますよ!そんな事しませんツ!」

今日何度目かの赤面を見たアララギ博士は「あははー」と笑う。

「冗談よ……あ、でも『むしよけスプレー』は渡しておくから使っておきなさいね。カノコタウンの外は野生ポケモンがいるんだから」

何処にあったかな?、とアララギ博士は自身の懐を探り始めた。

「え……でも……」

「でも何もないわ。何故かポケモンが襲って来ないと言つても『もしも』はあるんだから。……あつたあつた!じゃあ、はいこれね」

「……ありがとうございます、アララギさん」

「どういたしました。……ああ、それとわたしの事を『さん』で呼ぶのをやめてくれないかしら?これからは『アララギ博士』で」

「はい、分かりました。アララギ博士」

それを聞いて満足したのか「うん、よろしい」と笑う。

「それじゃあね、トウコちゃん。……あ、研究所の掃除の件、お父さんによろしく伝えておいてね」

「分かりました。……あ、それとアララギ博士、戸締りはしっかりした方が良いですよ」

「?……ええ、分かったわ。それじゃあね」

「はいっ」

そう言つて二人は反対の方向に向かつて別れた。アララギ博士は暫く歩いて気付く。

「あらら?向こうの空、曇ってるわね。これは一雨来るかも」

トウコを呼び止めようかと振り向くも、もうその姿は見えなかった。

アララギ博士に抱えられたチラーミイが『ミイ……ミイ!』と急かす。

「あー……はいはい、分かってるわよー。でも、雨が降りそうだから、今回は早めに帰りましょうか」

「トウコちゃん大丈夫かしら」と心配するも、「まあ、大丈夫でしょ

う」と根拠も無く思い直し、海に向かった。

——嵐が来ようとしていた。

l t o b e c o n t i n u e d l

l n e x t e p i s o d e l

3-1 降る雨は暗示する①-REGRET-

11

その日は来る。

――その日は来た。

ずっとこんな日々が続けば良いと思っていた私に。

――存外に悪くなかった時間を叩き潰すように。

当時8歳の私にはこれ以上ない程の害意が。

――「俺」という存在が不幸を撒き散らす存在だと言わんばかりに。

西の空の暗雲と一緒に。

――あの連中がやって来る。

「別離」という結果を伴って。

――「沈黙の確執」という形となって。

ごめんなさい。

――すまない。

私のせいで貴方は傷を負った。

――俺が原因でお前の心を傷つけた。

ただそれだけの言葉を、私は貴方に言えなかった。

――ただその程度の言葉を、俺はお前に伝えられなかった。

雨が降る。

雨が降る。

雨が降る。

――() () () ()

トウコはアララギ博士と別れて直ぐに 彼女が『キツネさん』と呼ぶゾロアークの下に向かった。

梅雨のせいでもうかれこれ2週間会えていなかった。その事実が

昨日まで……いや、今日 アララギ博士と話をするまでずっと鬱々としたシコリのように溜まっていた。が、今は違う。

トウコはトウコなりにゾロアークとの関係に向き合い、答えを出した。

まだまだ問題は残っているし、よく分かっている感情はある。それでも、鬱屈とした心に光が差し風通しが良くなっていた。

だからだろうか、トウコの足取りは軽い。

ゆつくりと話していこう。ゆつくり知ってもらおう。ゆつくり知っていこう。時間はある。一年でも二年でも……なんなら五年かかっても構わない。

トウコと一緒にこの世界を回っていききたい。

彼女の耳が小川のせせらぎの音を捉える。ゾロアークがいる大木の空き地まであとほんの少しだ。

トウコもうすぐ会える。ここを抜けたら、ここにきつと『キツネさん』がいる。

トウコが走る。木をよけ、地を踏みしめ、茂みを抜け――

「はい、そこまで。デンチュラ、でんじは だ」

トウコ……え。

瞬間、トウコの身体に今まで感じたことのない衝撃が走った。

トウコの意識と身体が乖離する。

身体が落ちる。

トウコ……

複数の足音がトウコに近づいてくる。遠退く意識の中で、「コツ、コツ――」という音がやけにはつきり聞こえる。

「あー……ちよつとやり過ぎたか？まあ、いいや……『でんじは』なら死ぬ事あ無えだろう」

トウコこの足音、この声……聞いた事がある。

「トウコにしても、オレの勘も捨てたもんじゃあ無かったか。お前さんが『目標』と同じポケモンの紙持ってたのがヤケに目に付いてなあ。

まさかまさかで……本当にまさかとはねえ……」

男ローロブの視界には、遠くにだが、確かに紅のタテガミを生やした黒の狐が写っている。

「いや、全く……道案内御苦労と言ったところだな、お嬢ちゃん。……おい、お目付役。スポンサー様に伝えな。『目標を見つけた。今度こそ仕留める』……つてな」

カハハリーという乾いた笑いが漏れるロブの後ろから別の三人が現れる。

男二人に女一人。その三人は中世の騎士をイメージしたようなチェインメール風の衣装に身を包んでいた。

チェインメールの一人がロブの言い様に不満気な顔をする。

「……勘違いをしないでいただきたいが、我々が行なっているのはポケモンの『保護』だ。今回の目標のような珍しいポケモンはトレーナーどもから『護る』為に行なっているのだ」

ロブは残りの二人のお目付役の顔を見る。どうやら、一人目と同じ意見のようだ。

それを見てロブは嗤う。滑稽だ。哀れでもある。

『ポケモンの保護』あるいは『モンスターボールからのポケモンの解放』。今回のスポンサーは確かにそういう名目で動いている。しかし、それはあくまでも『名目』。スポンサーの上の連中はそんな事露ほども考えていない。あれは多くの賛同者を得るプロバガンダか、本来の目的のための隠れ蓑に過ぎない。

例えば、今回の『目標』が捕らえられ『保護』された先で何が待っているのやら……。まあ、ロクなことではあるまい。

そう考えながら、今回スポンサーから依頼完了のためにと渡されたモンスターボールを見る。もう、中身は何も入っていない。『目標』の周辺で潜伏中だ。

ーああ、怖い怖い……。

その嗤いに気付いたチェインメールの男は怒鳴る。

「何がおかしいッ!!」

「いやいや、インヤ……何でも無いさ。……『保護』ね。ま、どつちに

しろやる事は変わらねえんだ。オレとしちゃあ、『保護』だろうが、『捕獲』だろうが……関係無いね」

「……たとえ、それが……『処分』であつたとしてもだ。受けた依頼を完了させて報酬を貰う。実にシンプルだ。」

チエインメールの三人は不満気だが、それをこの男に語っても意味の無いことは嫌になるくらい知っている。

「……それで、その子供はどうするのだ？ここで放置するのか？」
チエインメールの一人が聞く。

「それもいつも通りだな。……必要なら使う。使えないなら捨てる。取り敢えず、持って行こう」

と、ロブは少女の事をまるで道具かのように語る。

取り敢えず持つとけ、とお目付役の一人に押し付ける。

「……キーツネさ……」

意識が遠退く。意識が落ちる。

「西の暗雲がもう目と鼻の先にまで近付いていた。」

l t o b e c o n t i n u e d |

3-2 降る雨は暗示する②―MEANNESSE―

12

ゾロアークはその違和感を敏感に感じ取った。

「―風の流れがおかしい？」

しかし、それを感じ取った瞬間には全てが手遅れだった。突然、ゾロアークの周囲を砂の暴風が吹き荒れる。

「すなじごく　だ。……………ついでに、この辺り一帯に　くものすも張り巡らせた。悪いが今回は逃がさねえからな……………」

ゾロアークは声のする方を見る。そこに居たのは男。どこか淡々と語るその声をゾロアークは過去に聞いた事があつた。

「散々逃げ回りやがって……………おかげでスポンサー様はカンカン。俺たちも大損だ……………が、まあ、それを置いといて……………久しぶりだなあ『赤髪』。三ヶ月前に迷いの森でやり合つて以来か？」

確か、いつも背後にキルリアという人間の少女に似たポケモンを連れているのに、それを一切使わないおかしな男。実際、今日も連れてくる。更に三人―時代錯誤なチェインメール風の衣装に身を包む連中も背後に控えている。

『……………ッ!』

いや、それだけではなかった。

『……………うっ』

もう一人……………ゾロアークがよく知っている少女が意識の無い状態でぐったりとチェインメールの男の一人に抱えられている。

「ん?……………ああ、コイツか?名前は知らねえがお前の居場所を教えてくださいましたんだ」

『…………………………』

ゾロアークは男―ロボを睨み付ける。それに肩を竦めてロボは訂正する。

「……………ははは、嘘だよウソ。そんなに睨みなさんな。本当は近くの村から出て行くのを偶然見かけてな。外は何かと物騒だから止めよう

と後を追ったんだよ」

本当かどうかは分からないし、今この状況では栓の無い話だ。

「……んで、追って行ったらお前さんに出くわしたって訳だ。……ハハハ、おいおいお前さん、まさかこのガキに絆されてるって言わねえよな？あ、いや……俺たちの追跡をかわし続けたお前さんがこんなにアツサリと捕捉できちまったんだ……もしかしてマジか？」

ゾロアークは何も言わない。唸り声一つ上げる事なく敵を視界に捉え続けている。

「おいおいマジかよ……コイツはとんだ傑作だ!!一匹狼も人肌が恋しいってか?」

ロブは一頻り笑った後、「あーああ……」とため息を吐く。

「相手が無反応だと、笑つても面白味に欠けるな……。始めよう、ここでお前を仕留める」

灰色ポンチョが赤いボールを投げる。モンスターボールだ。

そして、モンスターボールの『ポンッ』という子気味の良い音と光の中から一体のポケモンが現れる。

『AAAaaaaSuuuuu!!』

ゾロアークの身の丈を超える紺色の四足歩行の岩石ーギガイアス。

その巨体が出現した瞬間、辺りで吹き荒れる すなじごくがすなあらし との相乗効果で勢いを増す。

ギガイアスの咆哮が周囲をビリビリと震わせた。

ー((〇))ー

「初撃はもらう。ギガイアスー ロックブラスト だ」

ーいわタイプ・物理攻撃技『ロックブラスト』

ロブの命令にギガイアスは答え、複数の岩石が砲弾のようにゾロアークに殺到する。

ロックブラストが直撃するーその瞬間、ゾロアークは後方へと軽く跳ぶ。そして、ゾロアークの前方で岩の砲弾が地面に炸裂し、昨日

までの雨を物ともせず、爆風で土煙が舞う。

その土煙がギガイアスとロボの視界からゾロアークを見失わせる。

「チツ……ギガイアス、じしーツツ!」

姿が見えないのなら、狙う必要の無い全体攻撃。それは正解の行動だ。しかし、それをゾロアークは許さない。

『……………』

ーエスパークタイプ・変化技『こうそくいどう』

自身の技で急激に引き上げられた速度でゾロアークは前へと踏み込む。辺りを舞う土煙を掻き分け、ゾロアークは現れたーギガイアスの目の前に。

「ギガイアスツ!! てっぺー」

ロボは、咄嗟に範囲攻撃の『じしん』から防御技である『てっぺき』へと命令を変えようとするがーそれよりも先に

『……………しーツ!』

ーかくとうタイプ・物理攻撃技『ローキック』

ゾロアークの鋭い回し蹴りがギガイアスを薙ぐ。ギガイアスの胴が碎かれ、大きな裂け目が走る。もはや、それを足蹴と呼ぶにはふさわしくない……まさに斬撃の如き一撃だった。

「……………オイオイ、マジかよ……あれ、ただのローキックだよな? 相性の良い悪いのレベルじゃ無えぞあれ。とかどころ辺が『ロー』なんだよ。普通に『ミドル』じゃねえか……」

だがーとロボは嗤う。

ギガイアスから一歩二歩と距離を置き、「次」を警戒し始めたゾロアークは気付く。

『……………Ga……………gi……………Ga』

「……………!」

瀕死の一撃を受けてなお、ギガイアスが生存している事に。

ーギガイアスが保有する特性『がんじょう』。それはHP最大値から瀕死に陥る攻撃を受けた時に発動する特性。瀕死の一撃を食らっても必ず首の皮一枚で生き残る、絶対生存の特性。

そして、ロボは無慈悲にその命令を下す。

「ギガイアスー！ー だいはくはつ だッ!!」

『……Gi::gi::GiGiGaaaaaAAA AAAA
Aーッ!!』

ーノーマルタイプ・物理攻撃技『だいはくはつ』
『ツッー!?!』

自身の命を引き換えにしたダイナマイトじみた爆音と衝撃がゾロ
アークを巻き込んで炸裂した。

ー（（〇））ー

爆風が止み、更に膨れ上がった土煙が止んだ中にはー

『……………』

ーゾロアークがいた。

「…………『赤髪』、お前……本当にポケモンかよ？至近距離で食らって
ピンピンしているとか……バケモノか何じゃねえよな？」

否だ。ゾロアークは食らったのでは無い。咄嗟に『とんぼがえり』
で爆発寸前のギガイアスの顔を蹴って後方に逃げたのだ。

「まあ、それでも無傷って事は無さそうだが」

ポケモンの捨て身の一撃ーアレは相当に危険だ。少なくとも直
撃したらゾロアークとてタダでは済まない。ポケモン一匹を使い潰
すような手段をそう何度も取るとは思えないが、警戒は必要だと自身
の頭に覚え留める。

「ポケモン一匹を使い潰したにしては大した見返りは無かったが
…………問題無い。そもそもオレはこの『役立たず』以外の五体 全部
を使って仕留めるつもりだったんでな」

ロブはモンスターボールを3つ一気に投げる。

そこから現れたのはー、

ーー体長80cmもある巨大な黄色の蜘蛛『デンチュラ』

ーー道着を着た赤い肌で大柄の格闘家『ナゲキ』

ーー道着を着た青い肌で細身の格闘家『ダゲキ』

「さあ、総力戦といこうか。覚悟は良いよな、赤髪イ」

ゾロアークは自身が負ったダメージを確認する。

「ー問題無い。先程の爆発で多少ダメージを負ったが、骨折のよう
な……今後の戦闘に支障の出るような大きな傷は無い。」

『……………チッ』

このような状況に陥ってしまった。そして、このような状況に巻き
込んでしまった。その自身の不甲斐なさに苛立ちを乗せ、ゾロアーク
は立ち上がった。

l t o b e c o n t i n u e d |

3-3 降る雨は暗示する③ーGAZEー

13

ポツーンポツーンつという雨音が後頭部を打つ。その冷たい感覚がトウコの沈んでいた意識を呼び起こす。

「……………うん」

『でんじは』によって失神していたトウコの意識が戻ったのだ。意識が戻り 最初に見たのは地面に生えた雑草。どうやら、トウコはチェインメール風の制服を着た男に抱えられているようである。

「……………、ここは」

吹き荒れる砂嵐で分かりにくいのが、ここは間違いなくあの大木の空き地だ。

「私は……………確か……………キツネさんに会いに行つて……………」

誰かに襲われたのだ。確かポケモン……………いや、近くで人の声がしたからトレーナーの扱うポケモンに、だ。意識を失う直前、そのトレーナーの男が何かを話していた。

ー確か……………キツネさんを捕まえるとか……………ッ!?

その時、私のすぐ近くで轟音と共に衝撃が走る。派手な土煙を伴って何かを着弾したのだ。

「キャッ!？」

「グワッ!？」

私と私を抱えていた男がその衝撃によって吹き飛ばされる。

「グッ……………痛い……………」

地面に派手に打ち付けた痛みが身体を突き抜ける。それでも難なく立ち上がり、着弾した何かを確認する。

それはー

「!?……………き、キツネさんッ!？」

慌てて駆け寄るトウコ。

「キツネさんッ!キツネさんッ!しつかりし……………て……………」

そこまで言いかけて、キツネさん……………いや、トウコが先程までキツ

ネさんだと思っていた物に異変が起こる。

「な、何これ……」

トウコの目の前で倒れ、意識を失っているゾロアークは、『ズズ……』という不快な音と共に全身の色が黒一色へと染まり、空気に溶けて消えていく。そして、残ったのは……緑色の怪獣の人形？それさえ、空気に溶けて消える。

「ああッ！クソツッ！そういう事かッ！クソツタレツッ！」

トウコは怒鳴り声のした方を向く。そこには、あの気持ちの悪い男がいる。アララギポケモン研究所に無断で入ってきた男。そして……トウコが意識を失う直前にその場に居た男。確か名前は『ロブ』。そのロブがこちらを……いや、先程までトウコの目の前で転がっていたキツネさんらしき物があった場所を睨んで悪態を吐く。

「意味の分からん わざ 使ってくると思ってたが……。あの野郎！よりにもよって、こんな隠し玉を用意してやがったツッ！」

男——ロブが何を言っているのか分からない。ただ、トウコの視線の先、ロブの更に向こう側で行われている「何か」のことだというのは分かる。

そのトウコの視線の先でさ、そこでは轟音を立ててポケモン同士が争っている。ポケモンバトルだ。

「……………え？」

ポケモンバトルを初めて間近で見るとウコにさえ異様に写った。

その光景に、トウコは困惑の声を漏らす事しか出来なかった。

——(())——

青^ダの格闘^ゲ家は岩をも砕くであろう正拳突きをゾロアークに振りかぶる。

赤^ナの格闘^ゲ家はあらゆる敵を薙ぎ倒すであろう巨腕でゾロアークに掴みかかる。

ナゲキとダゲキは かくとうタイプ。対するゾロアークは あくタイプ。相性はゾロアークにとって『悪い』と言わざるをえない。

立ち回っているのは明白だ。

ロブ……いや、人間というのは弱い生き物だ。ポケモンのように火も雷も氷も発生させる事が出来なければ、超能力もない。単純な力比べでもほとんどのポケモンに負ける。そういうモノだと自身で理解している。

人間は弱い……だからこそ考える。自分よりも強い生物を相手に勝つ手段を。

人間がモンスターボールを開発し、ポケモンの力を間接的に扱えるようにしたようにロー。ロブは自分と自分の従えるポケモン^{道具}より強い相手に勝つ手段を模索する。たとえ今回はダメだったとしても次回で……それが駄目でも、更に次の機会で『勝てる』ように考える。

それを知っている『赤髪』は執拗なまでに自身の情報をひた隠す。戦闘を行えば使う わざ を把握される。扱う わざ から自身の性質^{タイプ}を見抜かれる。戦術がバレる。考え方がバレる。戦闘の有利不利に関わる癖がバレる。だから『逃げる』という選択肢をヤツは取る。

ローだが、それもこれまでだ。

『逃げる』ゾロアークと戦闘を行うために、まず逃げられない状況に追い込んだ。今回、この辺り一帯を『くものす』や『すなじごく』で囲ったのは良い例だ。

『逃げる』手段を奪えば、必然戦わざるをえなくなる。そこからヤツの情報を奪っていく。

ヤツは野生のポケモンのくせに大量の木の实やら何処ぞで拾った人間の道具を使う。ローだから、特性『きんちようかん』を保有するデンチュラによって睨みをきかせ、そんな物の使うタイミング自体を奪った。

ヤツの わざ から性質^{タイプ}を見抜き、相性の良いポケモンも用意した。……まあ、これはヤツの扱う わざ の豊富さから幾らかのアドリを付けて地道に検証していったのだが。結果的に、今『あく』に有効な『かくとう』タイプのポケモンを二体用意している。

今あげたのは分かりやすい例だが、これ以外にも少しずつ少しずつヤツから情報を奪っていった。

そして、今回で『勝てる』と確信し、ケリをつけると決めてロブはここにいます。

だが、ロブは失念していた。いや、甘く見積もっていたと言うべきか……。

今回の獲物が、人間よりも『強い』ポケモンのくせに人間以上に『考える』生き物だということだ。

ロブがゾロアークから情報を奪ったように、ゾロアークも人間から情報を、知識を、道具を、奪っている。

自己の研鑽を怠らず、常に『人間』相手に『勝ち続ける』手段を模索している。

その事実を忘れていた。

そして、それが今、ロブの前で形となって――異様な光景として、立ちだかっている。

「クソがツ―ヤツの姿が増えたから かげぶんしん だとばかり思っていたが……テメエ、それだけじゃないなツ―」

ノーマルタイプ・変化技『かげぶんしん』

手段はポケモンによって変わってくるが、自身と同じ姿の分身を用意し、相手の目を眩ませる わざ。この分身は、生成する手段こそポケモンによって変わるが、質量をほとんど持たない事は共通している。故に有効的な攻撃手段となりえず、専ら敵に的を絞らせない回避手段として扱われる。

ロブはこれを攻撃時に本体と突撃させれば、相手を翻弄することが出来ると考えだ。だから、今回連れて来たポケモンの一体にして今回の攻撃の要であるダゲキに覚えさせ、一番最初に使った。

六体の分身……本体を合わせて七体のダゲキが姿を現わす。

『……………ケツ』

と『赤髪』が対抗するように、自身も かげぶんしん を使用し、ダゲキと同じ六体の幻影を出現させたのには小さな驚きを覚えたが、戦闘初めから人数的不利である『赤髪』が被弾を出来るだけ抑えたいのは 理解 できるからそれ程大きな驚きにはならない。

その後、これ見よがしに更に二体増やしたのには、「挑発のつもりかッ」と怒りを覚えた物だがー

ーそこまですら思考が止まってしまったのは悪手だった。

これまでに得た『情報』で、『赤髪』がより有効な手段やより良好は結果を優先し、挑発や煽りのような無駄を必要以上に行わない事は分かっていたというのに……。

……………。

結果から言おう。後に出された幻影は『かげぶんしん』では無かった。

翻弄されるダゲキとナゲキ。その中で奇跡的に入ったダゲキの『カウンター』で吹き飛ばされた幻影がその正体を現した瞬間に確信した。

「……………ああ、クソッ。そういう事か」

かげぶんしん だとばかり思っていた幻影は、緑色の怪獣を模したぬいぐるみのような物。

「……………『赤髪』。テメエ、『かげぶんしん』の中に『みがわり』を紛れ込ませやがったなッ!!」

ーそして、特性『イリユージョン』で見た目もヤツ自身の姿に偽装していた、という訳かッ!

更に言えば、ゾロアークは『かげぶんしん』の扱いも上手い。質量の無い幻影が、入れ替わり立ち替わり、ダゲキとナゲキを翻弄している。そして、本体と『みがわり』の幻影は一撃を与えれば、他の幻影に紛れ 死角へと入りなかなか特定させない。

対して、ダゲキの『かげぶんしん』は本体が特定され、囲い込まれているせいで残っているのにまるで機能していない。 わざ 一つの扱いからして ロブよりも考え、練られている。

『赤髪』ーゾロアークが、幻影に紛れ 鋭い爪から繰り出すV字の斬撃ー『つばめがえし』によって、ダゲキが血飛沫を上げて倒れる姿を睨みながら、ロブは確信を持って叫んでいた。

これでダゲキは倒れた。残りは役立たずを除いて三体。内、一体は

牽制と捕獲用、もう一体は一回きりの奇襲用。純粹な戦闘用はナゲキしかない。それだけで、本体とみがわり幻影を含めた8体を相手取る必要がある。

――ここまでか？今回はここで退くべきか？

勝てる見込みは皆無ではないが、小さいのではないか？

数の上では有利だが、状況は劣勢へと傾いているのではないか？

――相手の情報は得た。これを手土産として対策を練り、次の機会を待つ。いつも通りだ。

そこまで考えて、ピタリと思考が止まる。いや、切り替わる。

――いつも通り？

いや、違う。今回だけは、いつもと違う事が一つだけある。

――これを利用しない手は無い、か。

仄暗く染まり始める思考は、ロボの背後――ゾロアークを不安そうに見つめる少女へと向いていた。

l t o b e c o n t i n u e d |

3-4 降る雨は暗示する④ーHOSTAGEー

14

事態はゾロアークの有利に進んでいるように見える。しかし、それは「否」と言わざるを得ない。

『……………』

それを理解しているゾロアークは誰にも悟られないようにしながらも苦い顔をする。

ノーマルタイプ・変化技『みがわり』。

それは、自身の総体力から1/4を消費し、ダメージや状態異常を肩替りしてくれる人形を生成する わざ である。

そう。『みがわり』は体力を消費するのである。

避けたとはいえ ギガイアスの『だいはくはつ』で多少なりとも減った体力で一度に二回の『みがわり』を使い、ゾロアークの体力は既に四割を切っている。

勿論体力の回復手段はある。しかし、男が ダゲキ、ナゲキの二体を同時に駆り出された黄色の蜘蛛デンチュラがいる。デンチャラは、この空き地の中心ー大木の中からゾロアークの隙を伺うように睨みを効かせている。この状態では体力の回復もままならない。

更に状況を悪くさせているのはこの辺り一帯で発生している砂嵐だ。それが残りのゾロアークの体力を確実にすり減らし続けている。この砂嵐は、十中八九ポケモンの仕業だろうが、その姿が一切見えない為、今すぐ止める事も出来ない。

つまり、時間は完全に敵方の味方についてしまった、という事だ。この状況でどうするか。……そんなものは決まっている。

ー余計な時間を弄さずにナゲキを倒せなければ、この状況から生還する事が出来ない。

そこまで考え、足に力を入れる。その時ー、

「おいー、『赤髪』 イイツ!!」

男の声がした。その声には下卑た音が乗っている。

ゾロアークはそちらを向く。同時に8体の幻影の内4体を赤色の格闘家のポケモンに睨みを効かせたまま、残りの4体も男の方を見る。

そこにいたのは、男とキルリアとー

『ツーーツ?!』

ー男に髪の毛を掴まれた小娘だった。

「い、痛いツ、離してツー!」

トウコの悲鳴をゾロアークの耳が捉える。

「うるせえ……。ちよつと黙ってる。……さて、『赤髪』イ、この状況だ。お前なら言うまでもないだろうが……分かっているよな?」

ー……下種がツ!

ゾロアークの歯が湧き上がる怒りに軋む。ああ、そうだ。あの男が小娘を人質に取る事くらい予想できた事態だ。だが、今まで一匹狼として孤独に生きていたゾロアークには、その問題について 思い付きもしなかった。

ーいいや、まだだ。まだどうにかなる。

小娘の側にいるのは、あの男とキルリアのみ。ならば、幻影を全てナゲキの足留めに使い、助けに行けばどうにかなる。

それは、ゾロアークの脚力を持つてすれば十分どうとでもなる。ロボの側にキルリアという不確定要素が存在するが……そんな事を言っている場合ではない。

危険とは回避すべき物。しかし、必要な時に危険を被る覚悟が無ければ、ゾロアークは一步も進めなくなる。

ゾロアーク自身の半生が小娘へと向かう脚に力を込める。

その時、その瞬間……ゾロアークの意識は完全に小娘へと向いていた。

それはつまり、他への意識が完全に絶たれたという事。

『……………』

ーエスパークタイプ・変化技『こうそくいー

「やれ、デンチャラ。エレキネット」

ゾロアークが動くよりほんの少し速く。ロボの命令がデンチャラ

たのだろう。

これで残ったのは、ゾロアーク本体のみ。

ー舐めるなッ!

わざいを使うまでもなく、自身の爪と腕力で『エレキネット』を引き千切る。

「まあ、破られるだろうさ……だが、そんなに簡単には逃がさんよ。デ
ンチュラ、『でんじは』」

『ーカッ!?!』

瞬間、身体に言いようのない衝撃が走る。その衝撃に心臓が驚嘆の
悲鳴を上げ呼吸が一瞬止まる。足に上手く力が入らない。ブルブル
と震える膝は今にも崩れ落ちそうだ。

ー マヒ か!?

ゾロアークの神経が機能不全を起こし、脳の命令が筋肉にまで上手
く行き渡っていない。

それでも、と。あるいは、それがどうした、と強引に力を込め一歩
を踏み出す。

その瞬間、赤の巨腕がゾロアークの胴体を捉えた。

『!?ーッ』

「いようし、良くやった。ナゲキ、そのまま『しめつける』だ。ついで
に『ばかぢから』も併用させる」

ロボの命令にナゲキは無言で答える。ゾロアークを『ばかぢから』
で強化された両腕と胴体で完全に固定し、締め上げる。

ゾロアークの骨から悲鳴のような軋みが生じる。

両腕と両足が満足に動かさないゾロアークは、それでもナゲキの喉
元に喰らいつく。

『…………グッ…………ヌウッ』

だが、ナゲキの万力のような締め付けは一切緩まない。

「さあてきて…………『赤髪』。お前はギガイアスの『だいはくはつ』を難
なく回避しようだが…………今度は流石に逃げられないよなあ?」

ロボの声を聞き、ゾロアークに焦りが生じる。

この状況である男が何もしない訳がないのだから。

「このローツ」

『ロー卑怯者』か？カハハ、結構な事じゃねえか！そうだ、オレは卑怯者さ。言い訳はしねえ」

だからロー、

「人質役どうもありがとう。ここまで上手くいったのは間違いなくお前さんのおかげだ」

ローと、ロブはクツクツと嗤う。

「……………ゆるー」

トウコが何かを言おうとするが、ロブはその口を左手で掴み持ち上げる。

「んー？『許さない』か？……………まあ、どうでも良いんがな。オレはお前さんをゲラゲラと嗤いたいだけで、お前さんの話なんて聞く気はねえんだ。後は一人でやってくれや」

それだけ言つて、ロブはトウコを投げ捨てるように転がす。

小さな悲鳴が聞こえた気がするが、もう耳を傾ける気もしない。

「……………随分と派手にやらかしてくれたようだな」

男の声がある。見れば、後方で待機していたチェインメールの男女の二人の姿がある。……………二人？

「おう、お目付役様か。見ろよ……………あの『赤髪』が。散々、オレたちの手を焼かせた。あの『赤髪』がッ！こんな間抜けな手に引っかけたりやがったよ！！ああーあ、滑稽滑稽！」

ロブは嗤う。ゲラゲラと嗤う。嗤つて、嗤つてロー

「……………滑稽……………か……………」

そう小さく呟いた。

それは一体誰に言ったモノなのか。

『…………………………』

その後ろ姿を、『役立たず』と罵られ続けているポケモンローキルリアがとても痛ましそうに見つめていた。

「雨、強くなり始めたか……………。とつとと終わらせるか」

l
t
o

l
n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
l

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
l

4ー1 紅色に染まる①ーSMOKEー

15

ーこれは分かっていて。分かりきっていた事だった。

「自分」という存在は追われている。イツシユ地方南東部をまるまる一つ囲い込んで追い立てるように……。そう、まるで風潰しのよう
に捜索できる連中に、だ。

ーだからこれは予定調和だ。どうしようもなく。

だからこそ、「自分」は潜伏地を複数用意して隠れ潜もうとしたのだ。いくら探しても見つからないとなれば必ず警戒網に綻びが生ま
れると考えていたからだ。

ー言い訳はできない。しょうもない。

だというのに、「自分」はこの一箇所に残まってしまった。留まり過
ぎてしまった。

「自分」がここに「居心地の良さ」を感じてしまったから。もう少し、
もう少しとズルズルと先延ばしにしてしまったから。

ー「過失」……。 「怠慢」……。 「驕り」……………」。

人肌にもど餓えていたのか。……………噛める、本当に噛っちゃう。

ー間違いの余地は無く、これは俺の「業」だ。

ある年の春にイツシユ地方東南端に突然現れたポケモン、ゾロアー
ク。

大雨に濡れるその傷だらけの姿は、鉄の匂いを放つ『紅』に染まっ
ていた。

ー()()ー

ポツポツーという次第に早くなる雨音が、アララギ博士とチラー
ミーの足を急かす。

「ちよっ!?!雨降るの早すぎイ!!……………ほとんど海 見られなかったあ

！」

『ミイ！……ミイ！』

チラーミイはアララギ博士の白衣の下に捕まり、急げ急げとアララギ博士を急かす。

「チラーミイ、あなた……楽そうね」

自分が必死に走っているのに、楽をしている友人にちよつとイラつきを感じるアララギ博士。

そのアララギ博士の帰途の先で二人の人影があった。

「カルカ君、ウチの娘見なかった？」

「いや、見てないツスね。トウコちゃん、いないんツスか？」

一人は栗毛の女性。もう一人は年若い青年だ。

どちらもアララギ博士について面識の無い相手だが、片方の女性には既視感がある。

「……あの栗毛は……」

「……トウコちゃん……のお姉さん。いや、お母さんかしら？」
その眩きが聞こえたのか、栗毛の女性はアララギ博士に顔を向ける。

「あの、何方かは存じませんが、私の娘のトウコがどこに行ったか知りませんか？……雨が降ろうとしているのに、あの娘 何処にいったのかしら……」

トウカという女性の顔は心配気だ。

「あ、それならー」

と、言いかけてはたと言い淀む。

「ーこれは言うべきかしら？トウコちゃん、あんまり『キツネさん』との関係知られたくないみたいだし。……あれ？そもそもこれ教えちゃったら、私女の子が森に行くのを止めなかった人になるのかしら？」

やべえ、これバレたらわたしにも被害が及ぶ、などと考えていたらー

遠くで爆発が起こった。

大音量がカノコタウン中に響き、地面が揺れる。

「な、何？突然……」

「チョツ!? あ、アレ！ トウカさん、アレ!!」

困惑するトウカに、原因にいち早く気付いたカルカはトウコたちに指し示す。

「あれは……」

カルカの指が指し示す先——カノコタウン北部の森で大きな黒煙が上がっていた。

「な、何かしら……あれ……」

「……分かんないツスけど、オレ この村の警備なんで、確認しに行かない訳にはいかないツスよ」

「……そうね。私もレパルを呼んでから合流するわ」

「え? いや、でもトウコちゃんはどうするんスカ?」

「……確かに心配だけど、カルカ君の先輩としてアレを無視する訳にもいられないでしょ。……トウコなら、お友達の家でお世話になっているかもしれないし」

トウカとカルカが話し込んでいる間にアララギ博士が割り込む。

「それ、私もお手伝いしても良いかしら?」

その言葉にカルカがイヤイヤと反対の声をあげる。

「いや、流石に部外者を関わらせる訳には……」

「いいえ、今日来たばかりだけど、私もこの村の住人よ。……それに、

一応トレーナーの資格はあるから足手纏いにはならないはずよ」

アララギは白衣の下のチラーミイを二人に見せる。

「分かりました」

アララギの提案にトウコは同意する。

「チョツ!? 良いんスカ?! トウコさん!」

しかし、カルカは賛同出来なかったようで即決で同意したトウコに非難の声を上げる。

「賛否両論だけど、少人数で危険な所に向かうのなら三人スリーマンセル一組は必要最低限よ」

一人が何らかの問題で負傷した時、二人一組なら一人を引き摺って帰るのが精一杯。しかし、三人一組なら一人が負傷者を運び、もう一人が撤退の援護に回る事が可能になり、問題発生時の生還率がぐっと上がることをトウコは知っていた。

それにー、とトウコの言葉は続く。

「もしもの事を考えて村の防備も固めたい。この状況で人手は多いに越した事は無い。希望者が居て、その希望者は最低限の自衛能力がある。現状を考えたら願ってもない事よ」

「……なら、防衛側の人員と入れ替えたらー」

「駄目、時間がかかり過ぎる。今は早さが最も求められる。その状況で、防衛の準備の上に偵察の選抜までさせるのは時間の無駄。村長さん、頭の回転が遅いからね。なら、『偵察の人員は決定した』って事後報告だけした方が色々効率が良いの」

「むう……、分かりました。納得はしきれてないツスけど、ここでそんな話をしている方が無駄ツスもんね」

渋々とだが同意するカルカ。その答えに満足そうに笑うトウカ。「よく分かっているじゃない。……それじゃあ、偵察の協力お願いします」

「え、ええ……。こちらこそ、よろしくお願いします」

話を急に振られたアララギは若干の困惑を残した声で協力の要請に同意する。

「さて、カルカ君。悪いけど、この人と村の入り口で待っていてくれる？ 私はレパルを呼んで、必要な事を旦那に伝えてくるから」

「了解ツス。……あ、そう言えば……自分はカルカ。さっきの女の人 がトウカって言います」

カルカは足早に去っていくトウカを見送った後、アララギに向き直り、遅ればせな自己紹介を行う。

「わたしはアララギ。アララギ博士って呼んでね」

「はあ……。博士さんですか」と何処か気の抜けた口調で一人ごちらカルカ。

そんな姿を黙って見ていたアララギの服を内側から引っ張る感覚

がする。

「…………どうしたの、チラー…………ミイ」

『ミイ…………』

チラーミイのアララギを白い目で見ていた。チラーミイは知っている。…………いや、忘れてなかったというべきか。

「うっ、もしかしてトウコちゃんの事？」

勿論その事だとチラーミイは頷く。

「…………いや。わたしも初めは言うつもりだったのよ？でも、事態があれよあれよという間に進んじやってー」

『ミイ』

取り敢えず、それで納得しておく事にしたチラーミイ。だが、チラーミイは見抜いている。旧知の仲であるアララギが『このまま言うタイミング失わないかな？』とか淡い期待を密かによせていたことを。

それでも、

ートウコちゃん、大丈夫かしら…………。

と、トウコの身の安全を心配し、こうやってトウコを探しに行こうとする友人の姿がチラーミイの視界に写っていたから、取り敢えず見逃す事にした。

ー……………ー

小雨だった雨足はいつの間にか強くなり、トウコの服や髪が身体に張り付いている。

身体が酷く重い。それは服が雨水をたらふく飲み込んだせいもあるだろうが、きつとそれだけではない。

ロブから「もう不要だ」とばかりに転がされ、放置されたトウコは無力感に襲われていた。

ー…なんで…………どうして、私は何も出来ないのッ!?

キツネさんが戦っている間、トウコはただ見守る事しか出来なかった。そして、ロブという男にキツネさんを倒すための人質にされた。

それも終われば、いよいよもって価値がなくなったと言わんばかりに捨てられた。拘束さえされていない。トウコの行動も言葉も感情も存在も何もかもがロブという男の行いを揺るがす事は無いと判断されたのだ。そして、それはその通り。ただの8歳の子供には、この状況を覆すような何かなど存在しない。

トウコが好意を持つ相手を傷つける為に無理矢理に利用され、利用しければそのままゴミのように捨てられた。

もうトウコの顔は雨と泥と悔し涙でグチャグチャだ。

「しかし、流石にこれは死んだのではないか？我々の目的は『保護』である」と何度も言ったはずだが？」

「ー死!?!キツネさんが……」

チェインメール制服の男の言葉によってトウコの心臓を跳ね上げる。だが、考えてみれば当然だ。あの攻撃を至近距離で浴びて生きているなど考えられない。

「ーい、嫌……そんなの絶対に嫌……ッ!!」

心も体も未だに鉛のように重たい。思考が碌に回らない。ただただ恐怖が全身を駆け巡り、トウコの何もかもが黒煙へと駆り立てる。

「……まあ、普通ならな。だが、相手はあの『赤髪』なんだ。生きていても何らおかしくな……ん?おい、ガキ何処に行くつもりだ」

ロブの声なんて聞く気はない。いや、初めから聞こえていない。

トウコは自分の内から沸き起こる『キツネさんの死』という恐怖に突き動かされるように黒煙の中へと消えていった。

「ー((())())ー」

「……………あちゃー、人質放置してたら勝手に行っちゃったよ……」

こりや失敗、とケラケラと笑うロブ。

……しかし、その人を食った笑みを浮かべる直前までの無言は何だったのか。それをお目付役の二人は知る事が出来なかった。

「おいッ」

その態度にチェインメール制服の女が声を荒らげられるが、ロブの顔

から薄い、人を小馬鹿にした笑みは消える事はない。

「まあまあ、お目付役殿。そうカツカツするモンじゃねえよ。……どうせあのガキに何かが出来ると言う訳でもあるまいし」

今更、あの娘が何が出来ると……。いや、初めから何も出来ない。ならば、そんなことよりもー、

「さて、これからどうしますかね？お目付役殿。正直、あの黒煙の中に入るのは賛同しかねるのだが……」

「……貴様はまだあのポケモンが何かしてくると？そもそも生死……いや、原型が残っているかさえ疑問だ」

その通りだ、とロブも思う。だが、ともロブは思う。

「オレは『生きている』に票を入れるな。オレたちと『赤髪』は散々追い回し、追い回された仲だ。その間に何度煮え湯を飲まされた事か……。もう、油断はしねえ」

ロブはここに必勝を確信して来た。だというのに、それはアツサリと覆され、人質などという少々人道に反する行為に頼ったばかりだ。

……多少、警戒し過ぎだとは思うが。おっかなびつくりで二の足踏みしながらの方が絶対に良い。

「オレとしては、この雨で黒煙が消えるのを待ちたいんだが……。何かが燻ってんのか、一向に消えやしねえ……」

まあ、それでもこの雨だ。数分も放っておけば勝手に消えるだろう。しかしー、

「どうすつかなー？『赤髪』が生きていたら時間を与えるのも怖いんだよなあ……」

『はかいこうせん』の反動でデンチュラが動けないのだ。デンチュラの『きんちようかん』による睨みは未だ効果を発揮していると思うが、最悪、この黒煙の中で体力の回復に勤しんでいたらと考えると背筋が寒くなる。数分どころか一秒たりとも時間を与えたくない。

なら、無理にでも黒煙の中に入るか？そう考えると、逆にこの黒煙が『赤髪』の顎で馬鹿が口の中に入ってくるのを待っているように見えて笑えない。

「……だあツ！もうしようがねえ！わざわざ、あのガキが先行し

てくれたんだ。オレたちはその後には続けば多少は安全だ」

ややあつてから、ロブはあのクレーターの黒煙の中へと入る決断をする。

そう決めて、一步踏み出そうとして立ち止まる。そして振り向き、「なあ」

ロブは後ろのチェインメール制服の男に呼びかける。

「なんだ？」

「使うぞ？」

ロブのかかげた手にはモンスターボールがあつた。それはロブの最後の一体であり、『スポンサー』から預けられたポケモンのモンスターボールだ。まあ、中は既に空だが。

はつきり言つて言う事を碌に聞かない「ジャジャ馬」。渡された時は「行け」と「止まれ」しか言う事を聞かなかつた。今でも、しばらく運用していると急に命令を無視しだす。その分、その強さは本物でロブに『暴君』と言わしめるほどだ。

『すなじごく』で『赤髪』の逃走を防止する程度にしか使う気がなかつたが、デンチュラが反動で動けない以上、アレに頼る他は無い。

「……了解した」

チェインメール制服の男が神妙に頷く。女の方も顔付きが一段階引き締まつたゆうに思える。

実の所、この男たちの主目的はロブの監視ではなく、その『暴君』の観察や最悪の事態に陥った時の処分である。何故なら、『暴君』はただのポケモンでは無い。チェインメール制服が所属するある組織のフロント企業にして今回のロブへの依頼者スポンサーによる実験生物であるのだから。

「じゃ、行きますか。……待ってるよ『赤髪』イ」

そして、この場の全員がもうもうと立ち上がる黒煙の中へと消えていった。

l t o b e c o n t i n u e d |

4-2 紅色に染まる②—I R R E G U L A R I

【リメイク！】

16

見通しが一切聞かない黒煙の中を走る姿がある。トウコだ。

「————ツ!!————ツ!!」

視界はほとんど効かない。息も苦しい。それでも走り回り、叫び回る。

「キツネさん!」と呼びかける。生きている事を願うように。

いつの間にか土砂降りになった雨音でその声は碌に響かない。しかし、トウコはそれさえ気付く事が出来ず叫び続ける。

体が言う事を聞かない。心が言う事を聞かない。正常な判断など既に無いに等しい。何もかもが冷静に働かず半狂乱を起こしたように……けれども『キツネさんを探す』という思考性を持って暴れ回る。

「ゴホツゴホツ……キ……ツネ………さん——ツ!」

煙でむせ返りまともに息も出来ないというのに。

「あうツ!」

その時、トウコは 何かに足を取られ、地面に倒れる。

「何よ…… ヒツ」

トウコが足を引つ掛けたのは赤い巨腕。ゾロアークと一緒に『はかいこうせん』に巻き込まれたナゲキだ。生きているのかどうかは分からないが、前のめりに倒れたまま動く気配はない。

取り敢えず危険では無いとトウコは判断する。それよりも——

「ぞ、そうだ。このポケモンが近くにいるのなら……」

トウコは倒れたまま辺りを見回す。視界はほとんど通らないが、トウコのやや前方に『紅』が煙の中からチラチラと見えている。

「キツネさ……ん?」

トウコは這いずって向かう。冷静に考えれば立ち上がって向かった方が良いのだろうが、そんな思考は働いていない。

トウコが這いずって近付くごとに、少しづつ視界を邪魔する黒煙が退いていく。

あの『紅』はやはりタテガミだった。その内、黒の背中も見えた。毎日のように手入れを行なっていた鮮やかな毛並みは煤や泥で汚れ見る影もないが……間違いはない。

「キ、ツネさんッ!!」

動かない。トウコの声に反応を見せない。横たわるその姿が次第に使い古されたボロ雑巾のように見えてくる。暴走していた心と体が一気に冷えたような錯覚を起こす。

「……そ、んな……駄目……絶対に駄目ッ!!」

身体が動く。良くも悪くも冷えた思考がゾロアークまで向かう最適解を選び、トウコは立ち上がりとうとする。

だが、その背中がグンと重くなる。何事か、と考える間もなくトウコの耳が聞きたくなかった声を捉える。

「ウエツホ、ウエツホ……クソ、煙がむせる。……たく、世話かけさずんじやねえよ、ガキ」

ロブだ。

「離してッ！その足を退けてッ!!」

ロブはトウコの背中を踏みつけて動けないようにしている。

「離す訳ないだろ？人質か肉盾か……何にせよ、また役立つてもらうんだからな」

「……『また』!?また私を利用するの!？」

やめて、やめて……ッ！これ以上、私をキツネさんの足手まといにしないで……。

そんな想いは当然のようにロブには届かない。

「……まあ、あの様子だと必要ねえかもしれねえがな」

ロブは倒れたまま動かないゾロアークを見やって言う。

「……………チッ、デンチュラのヤツまだ反動で動けないのか。捕獲が出来ん。もうモンスターボールで良くねえか？」

ロブは後ろを付いてくる男女に聞く。

「良い訳ないだろうッ我々の目的は……」

「あー、嘘です。冗談です。ごめんなさい」

心底面倒だ、と言わんばかりに溜息を吐く。スポンサー様のご意向である。無視は出来ない。

本来は、モンスタールボールを使わずに捕獲するにあたってデンチュラの『でんじは』で常時マヒ状態にして移送し捕獲する予定だった。しかし、そのデンチュラが動けないのだ。

ー多少の融通はきかせてくれよ

と、言いたいのだが そうはならないのが連中である。

「しょうがない……。デンチュラが動けるようになるまで、ここで……待……つ……」

ロブは途中で言い淀み、無言でゾロアークを睨み付ける。そして、トウコから足を離し、かみを鷲掴んで無理矢理立たせる。まるで自身の肉盾にでまするように。

トウコの悲鳴が聞こえるが、誰一人として興味を示さない。ロブはゾロアークを睨み、お目付役の二人はそのロブを見る。

「……どうした」

「いや……今、『赤髪』が動いたような気がー」

ーした、と言い切ろうというタイミングで地面に転がるゾロアークの更に向こうから三つの獣の影が黒煙を破って飛び出す。

その影は、三体のゾロアークだ。いや、ゾロアークの姿をしている、と言うべきか。

背後の男女は驚きの声を上げるが、ロブは冷静に前を見据える。

ーどれが本物だ、と。

三つの影はあからさまだ。まるで、此方の視線を誘導しているかのように。

ーなら、あの三体は偽物。

その予感は的中した。ロブへと向いた鋭い爪が当たった瞬間、霞となって霧散する。

ーなら本命は。

下だ。飛び込んできた幻影を潜るような低姿勢で突っ込んで来るゾロアークの姿があった。

今の今まで地面に横たわり、背中を晒していたゾロアーク……先程まで『囹』をしていたヤツだ。

ゾロアークの凶刃が迫る。

それをロブは嗤う。そして、自身とゾロアークの間にトウコという肉盾を挟む。

——これで『赤髪』は止まる。いや、止めざるをえない。

そういう確信を持った笑みは一瞬にして歪む。ゾロアークはまるで止まらない。その一步は小揺るぎもしない。

ゾロアークの爪が刺さる——と思われた瞬間、そのゾロアークが霧散した。

「なッ!？」

——四体とも幻影だ?!?なら、本体は……ッ

背後で悲鳴が起こった。振り返った先で見たのは——

「なッ?!？」

——お目付役の二人が先程まで倒れていたナゲキによって殴られ吹き飛ばされた。

これには さしものロブでも何が起こっているのか理解が及ばず、狼狽の顔を作る。

そして、そのナゲキがロブの方を向き、襲いかからんと右足で跳躍する。

「ちッ」

いったい人間何人分の跳躍だろうか。空中で50kg以上の質量がコチラを叩き潰さんとはかりに右の拳を振り上げる。

これを8歳の子供とはいえ、どう見積もっても20kg以上あるトウコを抱えて避ける事は出来ない。

ロブは右手を——トウコを掴んでいた手を離し、後ろへと跳ぶ。

そして、残されたトウコの目の前に赤の格闘家が轟音を伴って着地する。

ややあってから、『ペタン』と腰を抜かして、トウコは地面へと尻餅をつく。そして、トウコとナゲキの眼が至近距離で合う。

『……………ケッ』

ナゲキは目の前の少女の無事を確認するように瞳を上から下へと動かした後、一つ舌打ちを打つ。トウコがよく知る誰かのような舌打ちだ。

「……………あ……………え？」

トウコは未だに事態への理解が及んでおらず、口をパクパクと開いたり閉じたりするのみである。

「おい、どういうつも……………ああ、成る程……………そういう事か」

ロブはナゲキの裏切りに怒りと困惑の声を上げる。

しかし、それはトウコとナゲキが見つめ合う姿を見て、理解の声へと変わる。

「本体はそっちだったか……………。ウチのナゲキに化ける、か。まんまと騙されたわ」

そのロブの言葉を聞いてかは分からないが、ナゲキの視線はトウコからロブへとー明らかな敵意を乗せてー移る。

ーそして、ナゲキの姿が赤から黒へと染まり、霞のように大気へと溶け始める。

同時に、やつとの事で土砂降りの雨が効果を発揮し出したのか黒煙が薄くなり、本物のナゲキの倒れた姿がロブの視界に写る。

「あ……………あ……………ああ……………」

トウコの口から嗚咽混じりの歓喜が滲み出る。

まるで雨水に洗い流されるように消えた黒の霞。その中に立っていたのは、『はかいこうせん』で爆発でボロボロになっているがー確かにゾロアークだった。

ー……………(○)ー

「……………まさか、本当に生きていたとはな。いや、まあ『生きていた』だろうとは思っていたが。……………こうやって実物を見せられると何故生きていたのか分からん」

油断はしない、と言って常にゾロアークの生存の可能性を考慮していたロブでも、あの爆発の中無事でいた事は驚きのようだ。ロブの顔

に冷や汗が流れる。

『……………』

ゾロアークの足は既に限界だったのか、ガクリと膝をつく。

「キツネさん!!」

それを見たトウコは先程の歓喜を忘れ、悲痛な声と共に駆け寄る。そして、ゾロアークに手が触れた瞬間、その手に違和感を覚え見ると、

「……………ツツ!？」

トウコの手が赤く染まっていた。

ゾロアークの身体はもう既にボロボロだ。死に体と言ってもいい。左足は下腿でへし折れ、いつものように走り回る事は不可能。肋骨に至っては折れた物の内のいくつかが内臓に突き刺さっている。視界が霞み、耳も遠い。

その姿にロブは冷や汗を流しつつも嗤う。

「……………が、流石に死に体か。当然と言えば当然だがな」

正直な所、ゾロアークとしても今こうやって生きているのが不思議な程だ。少なくとも、あの『はかいこうせん』が直撃でもしていたら……いや、ナゲキの背後に落ちなければ生きてはいなかっただろう。奇跡的にナゲキの巨体が『はかいこうせん』による爆発の傘になつてくれたからこそその九死に一生だった。……それでも、このザマだが。「……………成る程な。てつきりオレを奇襲して、最優先にガキを助けるとばかり思っていたが……。それだとその後が続かねえもんな」

たとえばあの『はかいこうせん』でロブの手持ちのポケモンが全滅していたとしても、残り二人か三人の仲間がいる。ここまで付いて来ているのだ。彼らもポケモントレーナーであることは間違いない。

「だから、手持ちを出される前に無力化しておこうって算段か。……やられた。一本取られたと言つても良い。……いや、コレはただ単にオレが気付けなかったマヌケだったってだけか?」

で、どうするんだ?とロブはゾロアークへと聞く。

「不確定要素は排除された。人質も取り戻した。その後はどうするだ?人質の代わりに足手まといを抱えてよお?」

『……………』

「ーッ!?!」

その言葉にゾロアークは何も答えないが、トウコは悲痛な思いで息を飲んだ。

ロボは嗤う。

「オレは言ったよな? 『五体で相手をする』ってよお。三体は戦闘不能で、残ったデンチュラは反動で動けない。あと『役立たず』は役立たずなので戦力外。これで四体。あと一体残してあるんだ」

そのロボの言葉を見計らったかのように、突然として地面が揺れた。

「……………な、なに」

揺れが大きくなる。何かが近付いて来ている。

『……………チツ』

「きゃッ!?!」

それにいち早く気付いたゾロアークはトウコを抱えて真上へと跳ぶ。酷使されきった肉体は限界だが、それでも無理矢理に跳躍してみせる。本来ならこれどころかかなる筈だった。避けられる筈だったのだ。

しかし、そこには二つの問題点があった。一つは『左足を負傷し、跳躍は右足一本で行われた事』。

そして、もう一つはー、

『……………ーッッ!?!』

「なーッ!?!」

今しがたまでゾロアークが立っていた地面が砕かれる。砕いたのはー大顎。

突如として地面から巨大な大顎が出現したのだ。

そしてー

ーじめんタイプ・物理攻撃技『あなをほる』

ーあくタイプ・物理攻撃技『かみつく』

その顎が閉じられ、ゾロアークの右足を捉えた。

『……………ギッッ!?!』

瞬間、ゾロアークの右足から様々な嫌な音が生まれる。

「き、キツネさー」

それは、肉が潰れる音。大量の血が吹き出す音。そして、骨が砕ける音。

『……ガアアアアアアッ!!』

ゾロアークは堪えるようなうめき声と共に吠える。

ーむしタイプ・物理攻撃技『とんぼがえり』

ーかくとうタイプ・物理攻撃技『ローキック』

二つの技を折れた左足に込め、大顎の鼻面を蹴り飛ばす。左足の骨折部が感覚神経を通してゾロアークの脳に直接悲鳴を響かせる。

人体構造の支えである骨格が折れた状態での足蹴。その負担は全て自身の筋肉へとかかる。それは当然の結果として、骨折部の筋肉繊維が幾つも千切れる不快な音を立てた。

その一撃に幸か不幸か怯んだ『大顎』はゾロアークの右足を離し地面へと再度潜っていく。

ゾロアークは背中から地面に落ちる。

それはクッションの代わりのようにトウコを傷付けない配慮もあった。しかしそれ以上に、砕かれたゾロアークの両足ではもう着地が出来ないからだ。

落ちた衝撃で損傷した臓器が激痛を放つが……もう今更だ。もうゾロアークの身体に『痛くない』所は無い。

なんとか態勢を整えるが、その姿は膝立ち。もはや、ゾロアークに立ち上がる事は出来ない。

「……ああクソツ、いきなり言う事聞かねえ……。奇襲かけるタイプミングくらいこつちに主導権寄せやツ」

ロボの背後で大地が割れる。そこから上半身だけを突き出して現れたのは先程の『大顎』。

赤と黒の外皮の二足歩行のワニ型のポケモンーワルビアル。

しかしー。しかし、あまりにもこれはー

「……………うそ」

ゾロアークに抱えられたトウコは絶句する。

「……まあ良いや。コイツはEG-86『Large Jaw』。まあ、オレは長つたらしいから『大顎』とか『暴君』って呼んでるがな。ある組織のフロント企業……オレの今のスポンサー様だな。そこで品種改良されたポケモンだ」

通常のワルビアルの体長は1.5m程度。成人男性の平均身長よりも低い。しかしこれはー。

「改良点は見ての通り『規格外のサイズ』って所か」

ゾロアークと対峙するワルビアルは上半身だけでロボの身長を超えている。全長は3mを超え4mに届かんとする巨体だった。

「さてと、ここからは正真正銘の最終局面ってヤツだ。死んでくれるなよ、『赤髪』。なんせコイツは碌に言う事を聞かないジャジャ馬だからな」

『ーBeeeeeeeeeahhhHHHHHHHHHH
Hツツ!!!』

巨大ワルビアルは吠える。

l t o b e c o n t i n u e d |

4-3 紅色に染まる③ーCHOISEー

17

『行け』ッ

ただ一言、ロブは命令を下す。その命令にワルビアルは最後の手綱を離されたかのように嬉々として手負いの獲物へと襲いかかる。

ーじめんタイプ・物理攻撃技『あなをほる』

瞬間、ワルビアルはまた轟音を立てて地面へと潜る。まるで水中を泳ぐように地中を遊泳し、ゾロアークとトウコを食い千切らんと虎視眈々狙いを定める。

ーまた来る。ゾロアークの右足を砕いた あの攻撃が。

それに気付いたゾロアークは左手でトウコを抱える。

「ぎゃっ」

そして空いた右手で地面を掴み、自身の身体を引っ張る。それだけでゾロアークとトウコの身体は大きく右へと跳んだ。

瞬間、先程までいた場所に大顎が現れた。地面を突き破って咲く花のように。

ワルビアルの『かみつき』は回避できたが、その眼は未だに二匹の獲物を捉えている。

「……………ヒッ」

そして、トウコはワルビアルの顔がドス黒い笑みを浮かべているのを見た。まるで、生きの良い獲物を虜めて遊んでいるかのような喜びがありありと浮かんでいる。

未だ宙を舞うゾロアークたちの真下ー。その地面に亀裂が入る。

『ーッッ!?!』

地面が割れる。そこから飛び出したのは赤と黒の縞模様。ワルビアルの巨大な尻尾だ。

ゾロアークは未だ空中。回避は不可能。

ーノーマルチタイプ・変化技『まもる』

ゾロアークはトウコを抱きしめるようにして身体を丸くする。

そして、衝撃ーッ!!

ゾロアークの身体がー丸まっている事も相まってーまるでボールのように更に高い空へと打ち上げられる。

『ガーッ』

ゾロアークは口から大量の血を吐き出す。

本来なら あの尻尾での打ち上げの衝撃程度、『まもる』で守られた身体は小揺るぎもしない。それでもある程度伝わってしまう衝撃はある。当然、本来ならー万全の状態なら無視できる小さな衝撃だ。だが、損傷した臓器にはその小さな衝撃でさえ激痛を伴う。

激痛による悲鳴を全力で噛み殺しながらも、ゾロアークはトウコの安否を確認する。

「ー」。――

トウコは無事のようなだ。歯を食いしばってゾロアークに抱き着いている。

尻尾で打ち上げられた力が重力に負けたのか、一瞬の浮遊感に遅れてゾロアークは下へと落ちる。

その真下ではワルビアルが大口を開けて待っている。今度こそ回避は出来ない。

『……………チッ』

回避が出来ない。……ならば迎撃するしかない。幸い、ワルビアルは油断しきり動かない。当然だ。動く必要が無いのだから。大きく開けた口の中に獲物が落ちてくるのを待てば良いだけの話なのだから。

ならばーこの状況でならば、足の負傷も関係無い。

ゾロアークの右腕の爪を折り拳を作る。これがワルビアルを倒せる最初で最期のチャンスになるであろう。ならば後先なんて考えずに最大の一撃を叩き込む。

それは数多のポケモンが保有する『わざ』の中で『はかいこうせん』に並ぶ最大火力を保有する一撃。

トウコを抱えたゾロアークがワルビアルの大口の射程圏内に入る。

それをワルビアルは感知し、口が閉じられる。

そして、閉じ切る直前にゾロアークの右拳がワルビアルの上口の内部――硬口蓋に叩き込まれた。

――ノーマルタイプ・物理攻撃技『ギガインパクト』
破砕音ッ！

その一撃はワルビアルの硬口蓋を構成する上顎骨と口蓋骨を粉碎して吹き飛んだ。

――（（〇））――

ゾロアークの一撃が巨大ワルビアルを吹き飛ばすのをロブは見ていた。

「なん、なんだよ……………」

ワルビアルはその衝撃に悲鳴すら上げる事が出来ずに自身で掘った穴へと押し戻され、落ちていく。

「なんなんだよッお前はッ!？」

ロブは怒鳴る。そこに先程まで浮かべていた愉悦の笑みは無い。

「もう死にかけてんだろ?! 虫の息なんだろ?! 足も折れてるじゃないかッ!!……………もう諦めるよッ。オレたちに捕まれよッ! いいや、とつとと くだばれ よッ!!」

――認められない。認めてなるものかよ。

――そうで無いと……………あの日のオレが惨め過ぎるだろうがッ

ふと、思い出したかのようにロブはキルリアの横顔を覗く。その顔はコチラに気付いていない。ただただ、驚きの表情でゾロアークとトウコを見つめている。

「……………クソッ! 『役立たず』が!」

ロブはキルリアを蹴り飛ばす。八つ当たりだ。

「……………クソックソッ」

ロブはキルリアを踏み付ける。

それから暫く。そこには息の上があったロブの姿がある。キルリアは散々踏み付けられ地面に倒れている。

「……………もう良い、殺す。スポンサーも何もかも知った事か。あの『赤髪』はここで始末する。どうせ、あのジャジャ馬を制御なんて出来ねーんだ。お目付役共がもういない以上、誰もアイツを止められないッ」

雨でベタリと張り付く髪を掻きあげてロボは否定する。

ーゾロアークという存在を。

ー惨めな過去の己を。

ー（（○））ー

ワルビアルは怒り狂っていた。

ーコロス、コロス、コロス、コロス……。

ただの餌の分際でこのオレ様を傷つけやがった、と。

今も口の中が激痛で狂いそうだ。

先程のゾロアークの一撃は急所に入ったようだ。ワルビアルが保有する隠れ特性『いかりのつぼ』が効果を発揮し、ワルビアルの攻撃性、凶暴性が暴走しだしたように跳ね上がる。

それはワルビアルにとって初めての屈辱だった。

ーカミコロス、クイコロス、『カミクダク』……ッ

ー（（○））ー

ー仕留めそこなった、か……。

ゾロアークは地下で断続的に発生する振動を感じ取っていた。きつと、ワルビアルが地下を掘り進んでいるのだろう。

確かにワルビアルの骨を粉碎した感覚はあったが、それだけ。『ギガンパクト』が脳への致命傷を与え切れなかったようだ。それでも多少は入った衝撃で脳が揺れ、平衡感覚を失っているのか、滅茶苦茶に地下を掘り進んでいる。……………が、それも時間の問題。

そして、ゾロアーク自身は両足に続いて右腕の骨も砕けた。もともと骨にヒビが入っていたのだ。反動付きの強力な一撃を無理に放て

ばどうなるかなど一目瞭然の話だ。上腕骨は無事だった為か辛うじて肩は上がるが、肘から先は完全に動かない。

これでゾロアークはトウコを抱えて回避する事も出来なくなった。ゾロアーク一人ならそれでも抗い続けたのだろうか……。

ゾロアークはコチラを見つめるトウコを視界に捉える。トウコの顔はゾロアークの安否を心配する表情で、いつもの快活な笑みは無い。

ーすまない。

この状況ーこの問題はゾロアーク自身が呼び込んだ物だ。追われている身でありながら この森から早々に立ち去らなかつたゾロアークの怠慢だ。この小娘に落ち度なんて無い。全ての原因は彼女ではなくゾロアーク自身にある。小娘はその問題にただ巻き込まれただけ。

ー次で覚悟を決める必要がある。

自分の身を守るか、小娘の身を守るか。

最悪、小娘を啜えて回避する選択肢もあつたが、その後はどうしようもない。『ギガインパクト』は一度きりの起死回生の一撃だった。流石に敵のワルビアルは二度目の機会をくれるような馬鹿ではあるまい。

ーならば、

地下の振動が落ち着いた。出鱈目ではなく指向性を持ってコチラに近づいてくる。

ーゾロアークの左手がトウコの襟首を掴む。

振動が少しづつ少しづつ大きくなる。

ーゾロアークの左手がトウコを横薙ぎのように投げる。

ゾロアークがいる地面が砕け、鋭い歯が並んだ大顎が現れる。

ーあの小娘が何かを叫んだようだったが、もう……聞こえない。

ーあくタイプ・物理攻撃『かみくだく』

ゾロアーク は 目の前が真っ暗になった。

トウコの狂乱する悲鳴が雨音と共に響く。

l t o b e c o n t i n u e d |